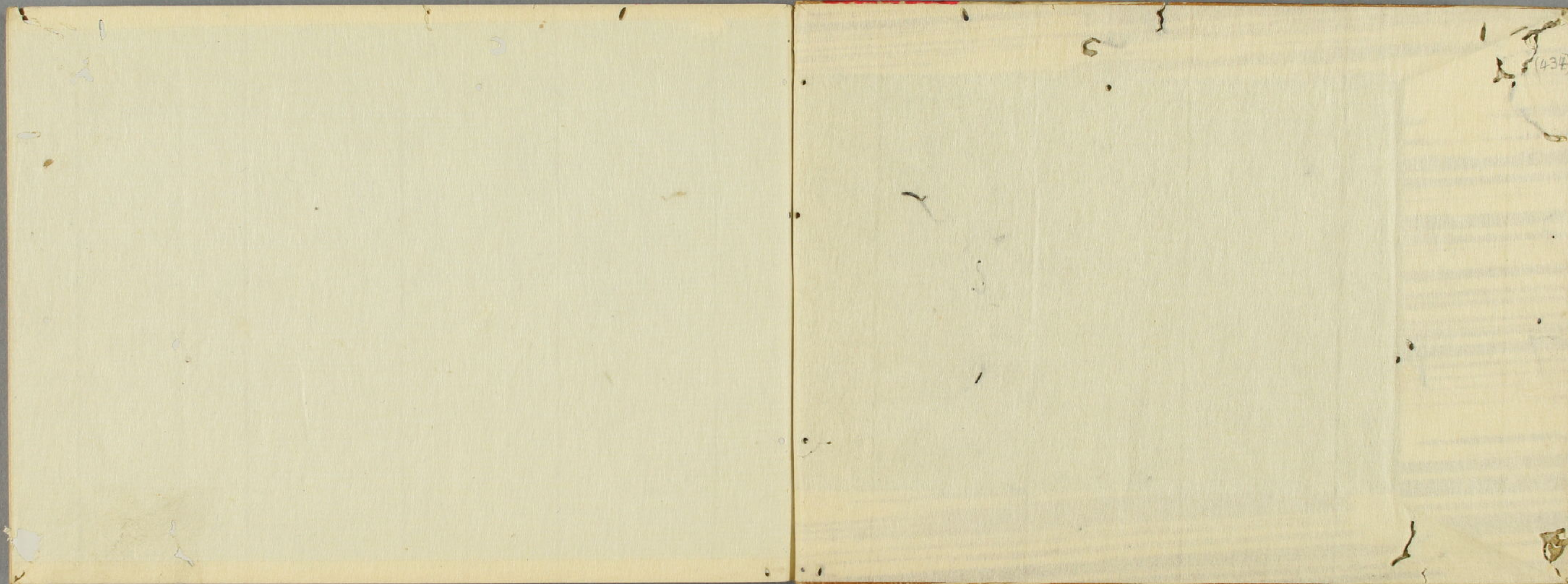


雁鳥書

73
3645
434





門 7.3
3645
卷 434

一 鷹具之卷

二 花鳥付口傳

三 鷹方古寶集

四 鷹方傳各

五 鷹之昏

六 鷹起源

七 西園寺殿鷹百首

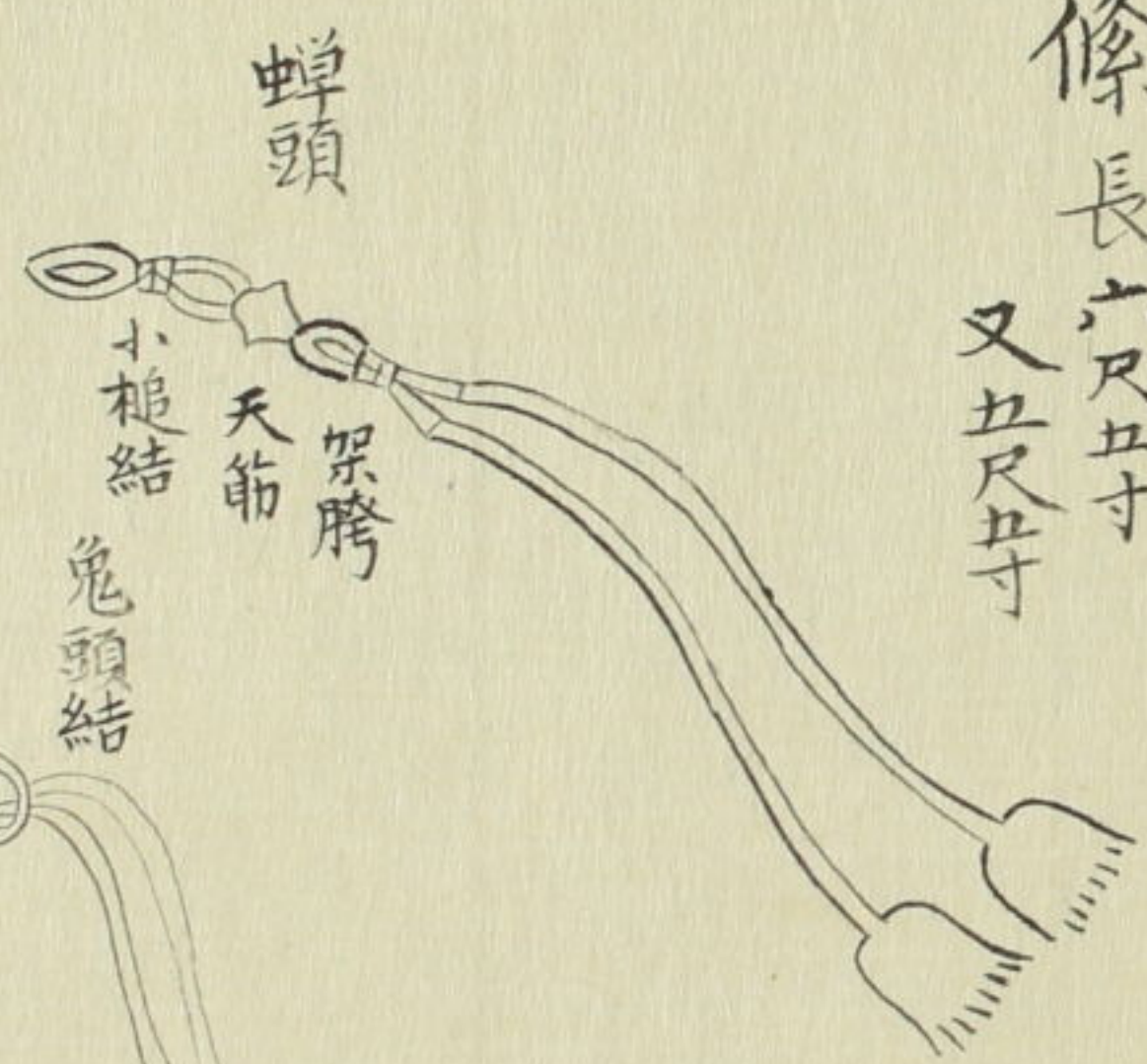
八 定家卿鷹問答

九 鷹名所

十 鷹十二架



鷹之具卷
條長六尺五寸
又五尺五寸



掛緒紫草

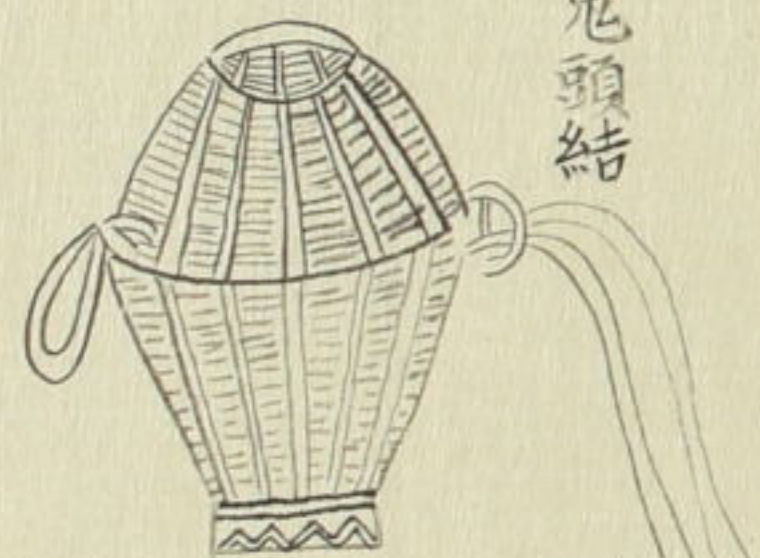
汗走

血鬪

烏首結

諸緒
腰輪

蛭口
劍先
芝引



足草

目

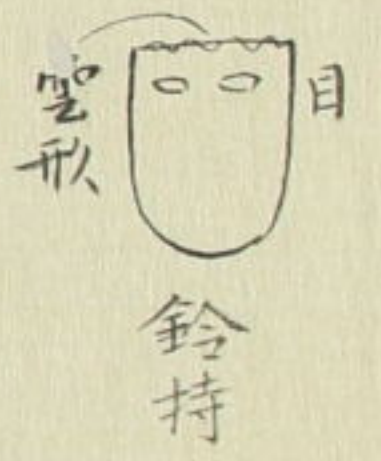
脛

縫目

山形手覆上毛

將其頭

鈴板



鈴



鷄

藤長一尺五寸 七寸九寸

大策 藤長一尺二寸或一尺三寸

菊四割

野子杖

梅木長七尺寸或人之長
又笠ノ縁長ト云

犬飼狩杖

梅木其ノ膺長
又桑椿モ用

鳥掛子
草突

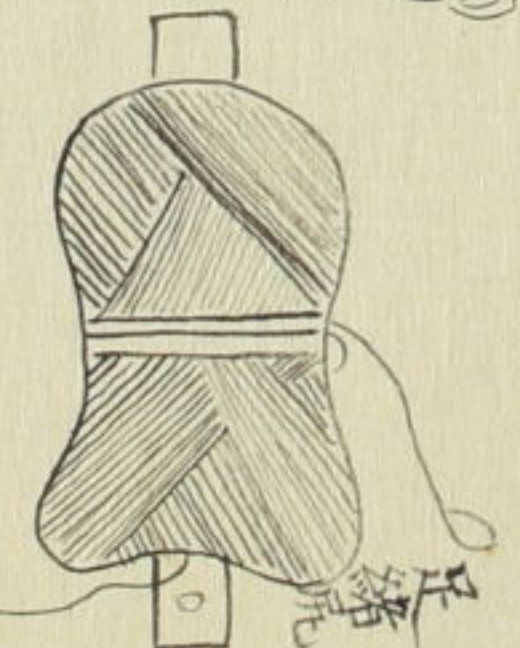
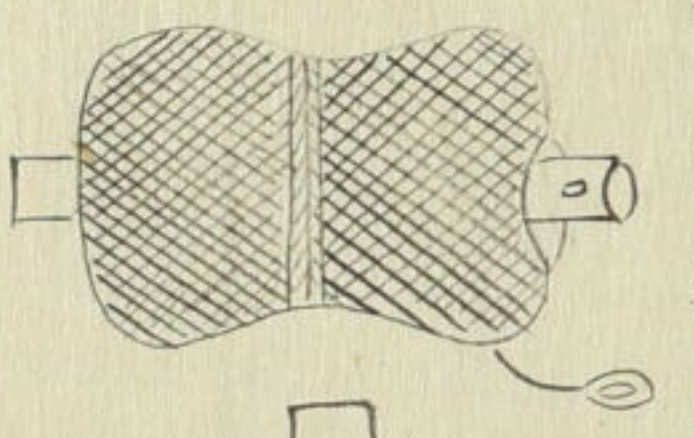
草分

鷹匠狩杖其身乳通

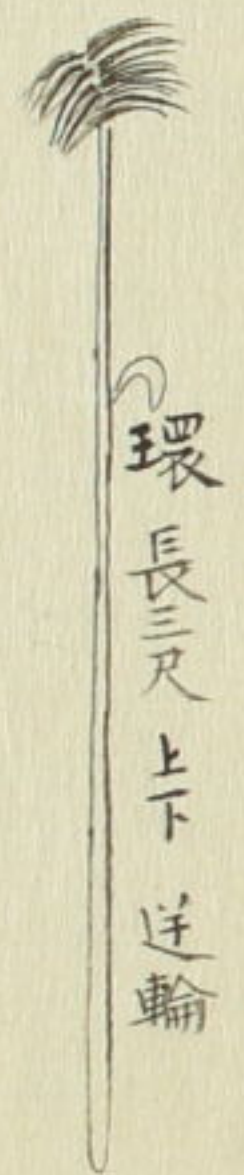
繳

長三十尋半繳十五尋亦七尋
筒長二寸五分楮目上表ノ方ニ明ニ

置繩

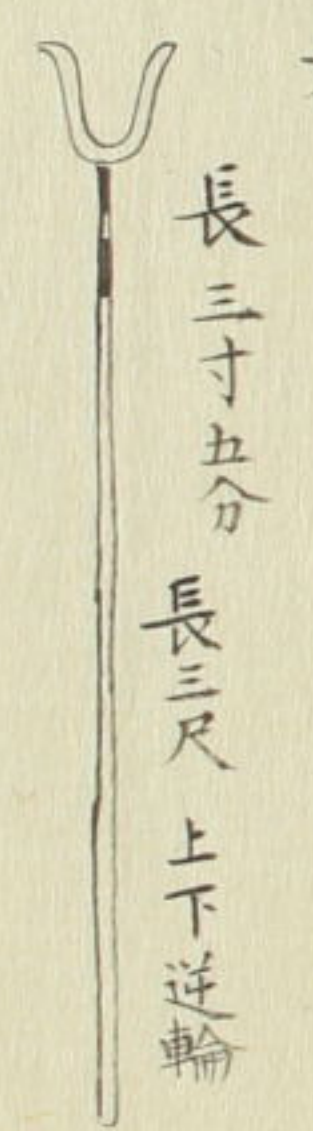


罪拂



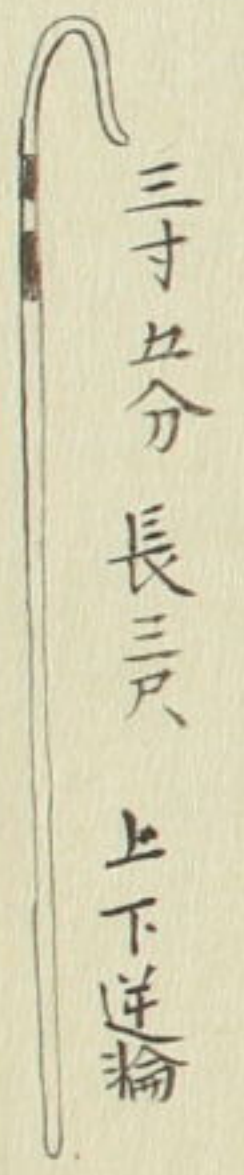
環長三尺上下送輪

捻木



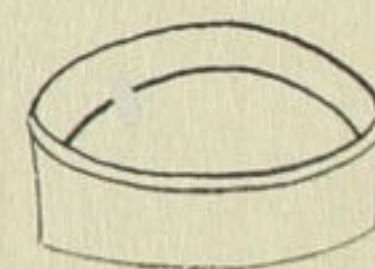
長三寸五分 長三尺 上下送輪

揚木



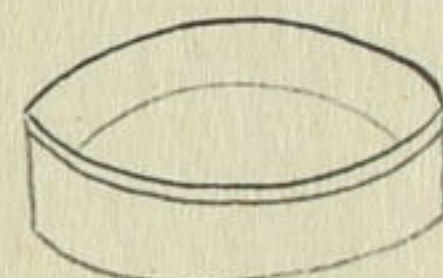
三寸五分 長三尺 上下送輪

餅板



徑二寸八分
外黑
內朱
高一寸二分

同



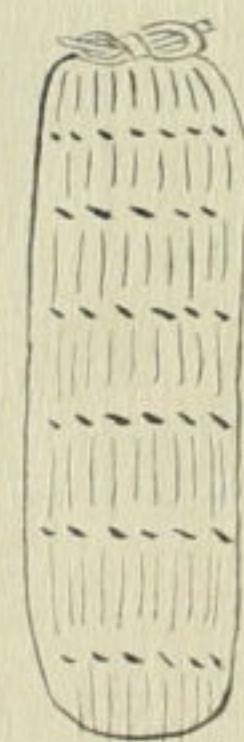
長三寸五分
高一寸五分
幅二寸五分

餅交



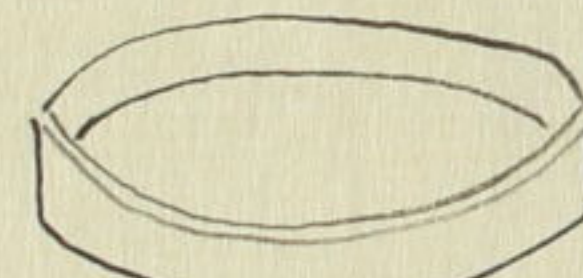
長八寸
幅八分

餅苴



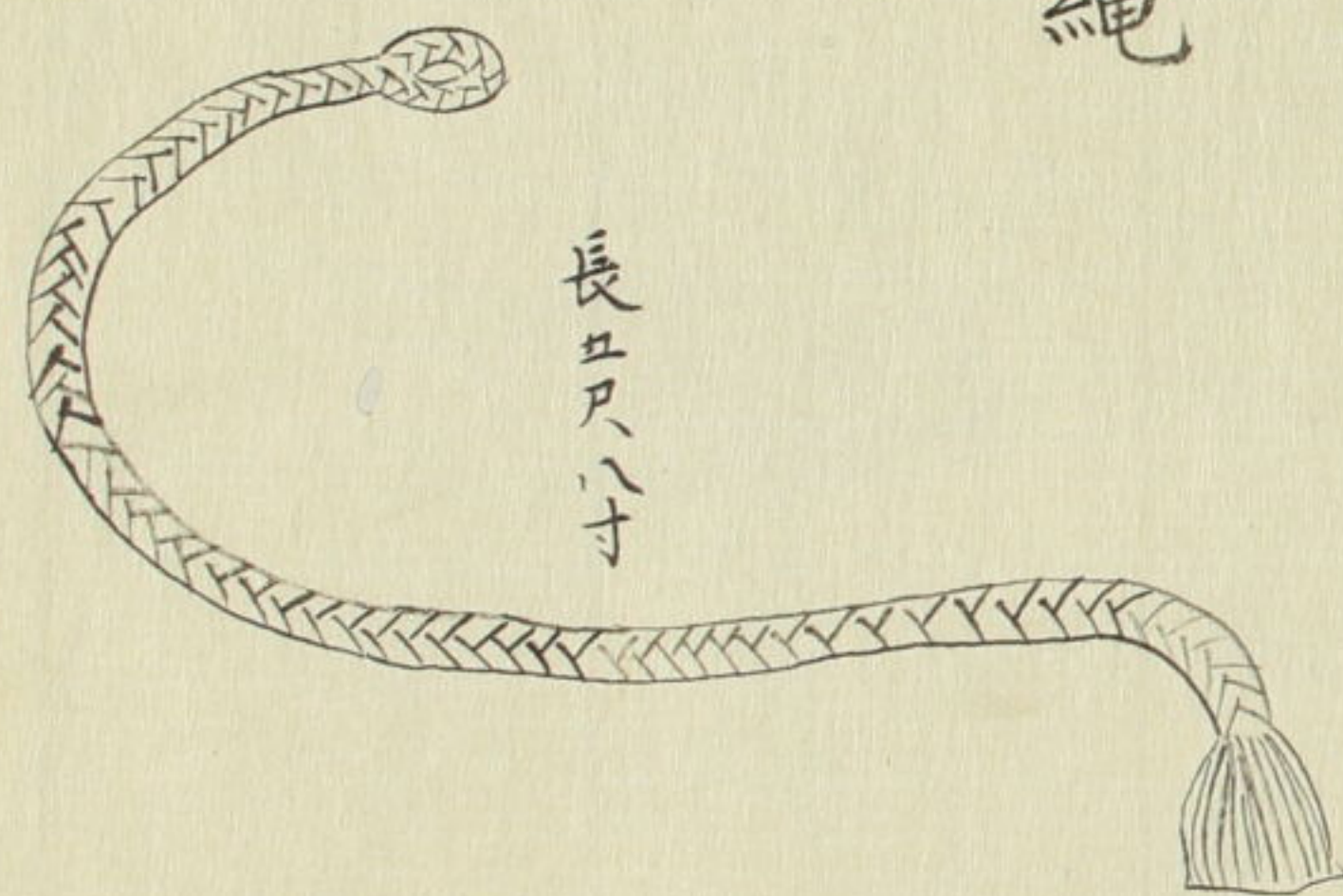
長六寸
幅同口

米真板



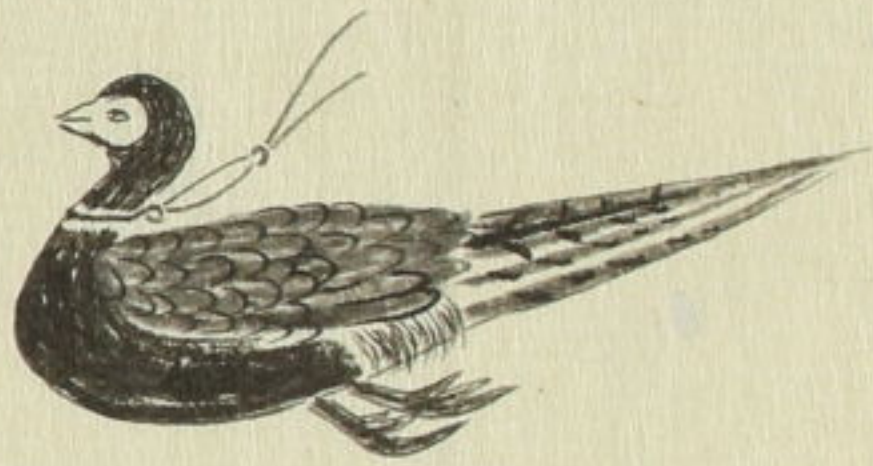
長一尺八寸
高八寸
幅九寸

水繩



長五尺八寸

大の宴いひきり多きを茶を田の物
 菓子馬うまれとくて魚口傳



山徳やまのりの友ともは雌メに割わちを角かく一
 山やま北きたる田のり下したの境さかいとある付つけ
 ちふた進すすむた。人ひとを急いそぐ



けり二ツふたつ伏ふせ長なが鏡かがみよ切きり
 け結むす目めと下の結むすと四寸よっすん万まんとを



花はなよる新あらたあま一ひと為なふ成なりまを
 我われ親おやも君きみうたためやと打うち花はなを
 と破やぶしとけりぬ物ものふとさそり



田のり物もの何なにし鏡かがみ

下した鏡かがみ目めより二寸ふたすん垂たり
 相あ換かひを切きり一ひと方かたは
 下した切きり何なにし出で陽やう分ぶん

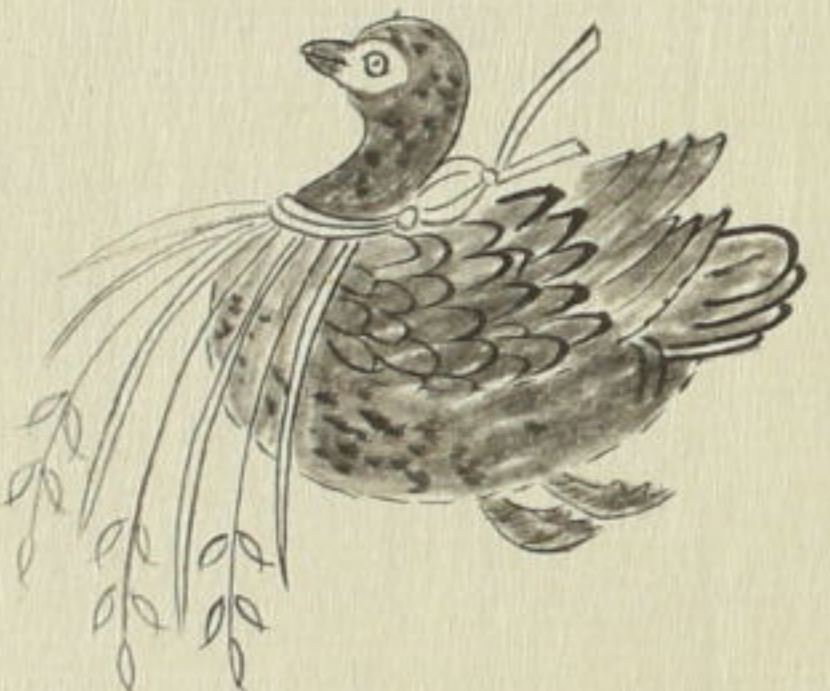


二寸四分
一寸二分
六分

初身服才之子孫口傳大
子孫曰



田面乃初身他之在附ハ稻を者
ハ九法合有方を縄よりハこれ
よそれのこゝ無きハ胸ハ稻穂
ハくれハ不互ハ初身ハ是ハ
大秘事ハ口傳



鴨ハ此結目より七寸と云録
録我横手金浪湯子切屋ハ口イ



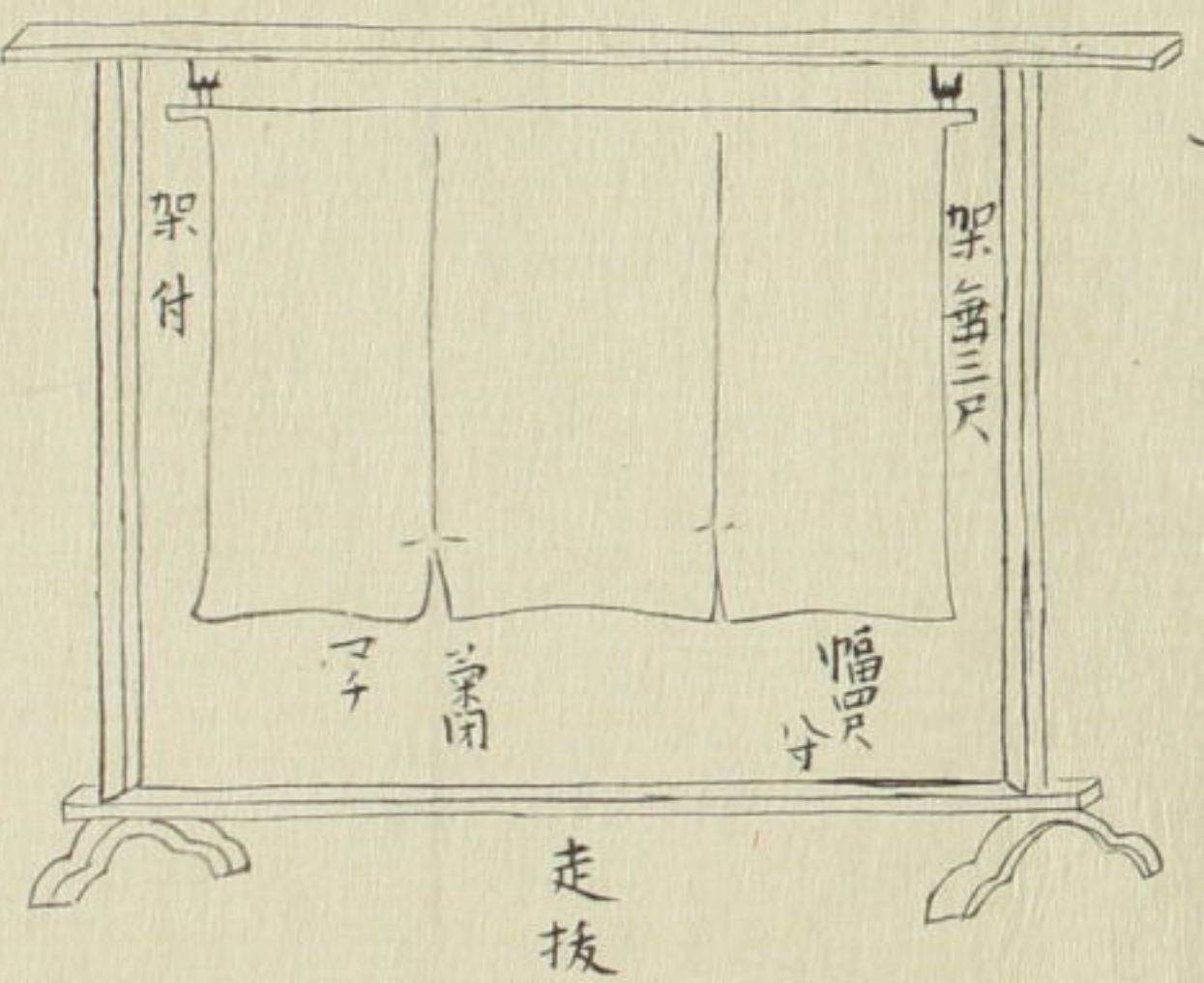
鷄雲雀接枝の事竹の枝を二
 三枝油一節を足るを足
 合指子能指よ枝に頭と物を
 挿入し挿入の事を紙を
 着けし
 着けし挿入し挿入の事を紙を
 着けし



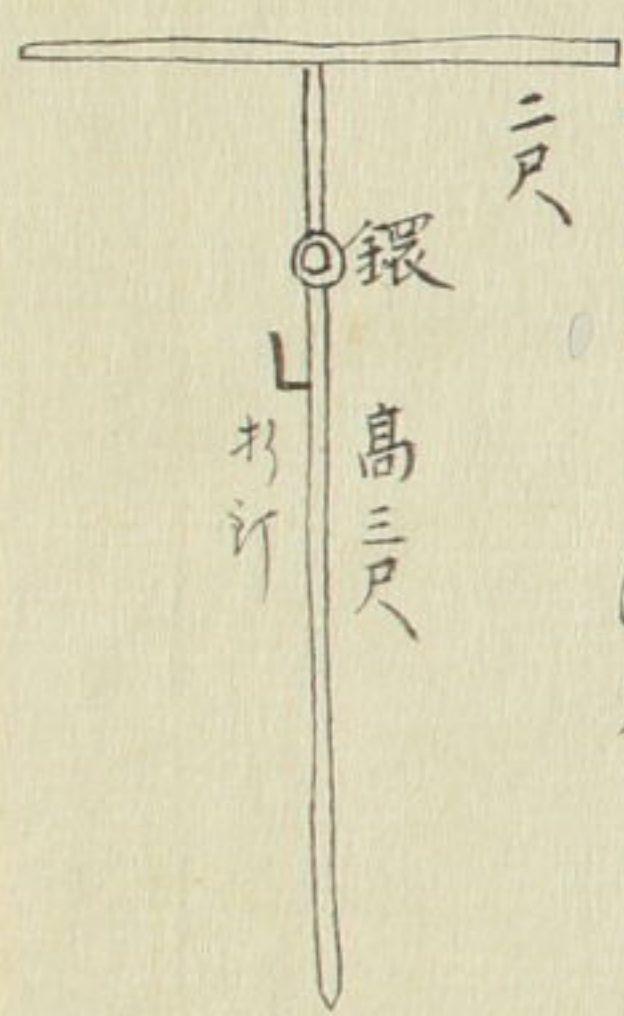
竹の節に枝を挿入し挿入の事を紙を
 着けし挿入し挿入の事を紙を
 着けし挿入し挿入の事を紙を
 着けし



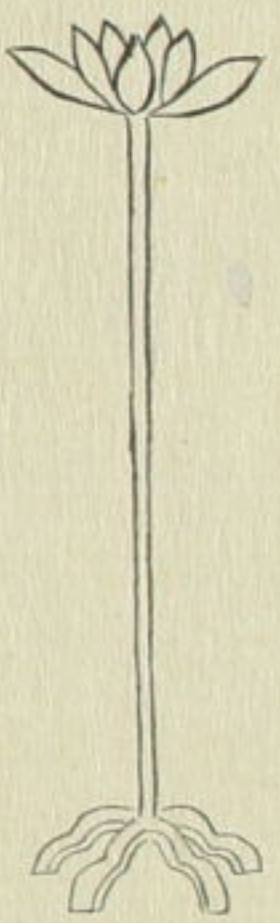
架は梅骨木用事秘中の秘
 有る第一也寸長六尺八寸
 寸之尺六寸或は尺八寸を
 寸之尺六寸或は尺八寸を
 寸之尺六寸或は尺八寸を



杞架是れ枕を二二を並べ対の
 二尺



燈臺架是て坐しう遊之は是
花の形才法匠あり秘多あり
口傳



小笠原大膳左衛門

長時

曰 右近左衛門

貞慶

花より附家口傳

我新玉買ったわおと
とていし 花を
いつぬぬうとさう

長月

花の具に多分業平長月
乃以む免の儀に猶子と
深敏の大信とより時の方利
大信いと賢くたうと信ひ
はよ流経うと信勢物信よ
と(まう)

深敏の大信とと堀河此大政
大信を利 語を号忠仁云
業平深敏の古片被宣之
又在今集身十七ふかきう
あき 忠を是かと信むいせ
しむりぬぬおとあ利とると
幸と題讀人古片とあ利
古信ふこれそ前大政古信の
あ利ととる信忠仁の誦子
かよはありしを見傳りしと
とん也

一 多身内木の事春梅櫻を中
と信花盛の枝を深と信をみ

うはゆる由(も)うなるとぬるを

たいた(り) 新三派の冬と期智といふ春と

一 存るとい(て)なる集の事をし

存る 存る

一 存るは(り) 貴人(に) 九段(一)と

大徳を(り) ありし(り) 身を(り) 止(り)

回(り) 下(り) 上(り) 中(り)

又(り) 下(り) 上(り) 中(り)

下(り)

一 存る(り) 存る(り) 存る(り) 存る(り)

立(り) 存る(り) 存る(り) 存る(り)

見(り) 存る(り) 存る(り) 存る(り)

存(り) 存(り) 存(り) 存(り)

鞭(り) 存(り) 存(り) 存(り)

尾(り) 存(り) 存(り) 存(り)

五法七法の鞭と云

一 人の存る見(り) 存る(り) 存る(り)

雲(り) 存(り) 存(り) 存(り)

見(り) 存(り) 存(り) 存(り)

同(り) 存(り) 存(り) 存(り)

下(り) 存(り) 存(り) 存(り)

一 同(り) 存(り) 存(り) 存(り)

お(り) 存(り) 存(り) 存(り)

お(り) 存(り) 存(り) 存(り)

中(り) 存(り) 存(り) 存(り)

と(り) 存(り) 存(り) 存(り)

一 架(り) 存(り) 存(り) 存(り)

身(り) 存(り) 存(り) 存(り)

見(り) 存(り) 存(り) 存(り)

見(り) 存(り) 存(り) 存(り)

の(り)

一 鞭(り) 存(り) 存(り) 存(り)

鞭(り) 存(り) 存(り) 存(り)

鞭(り) 存(り) 存(り) 存(り)

陳(り) 存(り) 存(り) 存(り)

乃(り) 存(り) 存(り) 存(り)

一 存(り) 存(り) 存(り) 存(り)

と(り) 存(り) 存(り) 存(り)

存(り) 存(り) 存(り) 存(り)

の(り) 存(り) 存(り) 存(り)

一 存(り) 存(り) 存(り) 存(り)

右の方より取付目見の板より
雄の背を人の方へ引渡
まぐね人の方へ向くはまの
一併試す(至餅屋事雄の背
及びして指雄の背の板を
さすや)

一併試す(けねるきり飼の板
架の方へまぐねの口を向掛
るに餅試すの口を上へして
魚のともや)

一かくし架結事縄を二重にし
割縄よりく中本の方へいか
す法末本の方へとの方を結
ぶるや

一架せぬものろく架密ニ不用
おろの浮尻に掛くと押山と
石版を用ふる古例も浮尻
と架密とせし書を書きして
魚のともや

一大法の色白生身は架密ははを
指さうる架山ゆまに紅白の赤

一棘の致草身をよ木草にて
指のめし物を身下網懸しに
枝葉を身へし架山ゆま
に架密とせし書を書き

一骨の多枝密中付る血杯に
や(き付に赤く扇をわき
めけの眼に骨をささるも不若尼
合ふともや)

一骨の正く骨の多文に骨貯
付にかけをきりて書法にか
りきりハ骨方を骨に直さ
一骨の骨板たの手と骨の骨
を指く骨の板を取らして
木を板横く骨を骨に直さ
人(骨よりた手)のせし書

乃を向く一々大身と云一礼一
大身と云一源立とのや又砂
木と云く眼の内を云へば一法
云一會ハ即指不包あり即指
才法あり云云一

一 臺架主人の兼持者半二人
一 して両方の柱を持ち架蓋の
體目を表一して事とのや

一 會ハ是合礼の更貴人の會ハ
事との人ト云云一一人より會
主と云く上言及付ハ手總統
の礼主ト一歩之の人ハ是と

一 統一會通の右一ありよ一
會通ハ猶子居る教を授かり
是會通の礼ハけ所育人禮ハ
柳子年一山伏個御師一會通
は是禮法の式ありと云り

一 會ハ是日を半子奉の月不宣

年中の日々と古人にや

一 會ハ是日七ツの事と云

鴉ト雀類雀ト

一 説云七九十一物教あり半ハ
一 扱又雀鴉ハ竹ハ扱鴉ト云雀
ハ秋落ハ自ら只を和草
て付るを能く是を推取付
と云又付ると扱と云何勢
云雀を一扱と云眼ハ面をヤあり
一竿と云と云百と云り竹ハ鷹竹
多う竹の中ををらう一返カ云
分也竹の長さ七尺母又七尺寸
七尺寸と云く枝と葉を海一
指子より一竹の乃より割て
扱ハ改教流よりそのるを切
ハ扱ハ株津流之扱と云るを紙
より一と云一扱ハ右の二扱一竿の
扱ハ云雀子限る之付ると云
柄ハ鴉ト云雀を秋菊落杯

小多と中や

一 秋多し紅葉子なる長き回し
小多ハ秋落子もなる花之
工と侍や

一 ありハ手持此子なる侍仕
此輩をかくら紫木云何と
木の中よりらうー返力を
あふ、まらや

一 初雪降きる別府の方より
多双弟もさるく初雪といと

一 毛留の鼻のうくさぬ程よ
降さきさき弟も白くといり
一 松子指す年義家以来源家
よ石川代家といふ

一 彦左可かといふ多双き小吹ハ
四子ハ根門の事を田也

一 官位元披移流初雪の排倉
大郷杯の何子唯唯二双を并

ふるまの肉玉のは侍も

一 一條殿の大臣業平より長月
の比栴の作りむと雛子と并
く弟も一侍勢相降よ

一 又くさう大臣宿願くたり
可く侍ハ何子深遠といふ

一 不吉の言も扱も半身言ハ
鏡の付る方の方の尾を二生
斗量一ツ切く扱を之と并
身の方を切く扱もあり
分奥よりあり

一 言も扱も半親死云云と扱ハ
子より扱も葬場まで紙の
足草を子息ちざうて扱も
戦場まで死せせハ幸へ送
りて扱もまのこ持ま死て
子か々世ハ人よ世をそ身
名取絶地より扱も治る

書を弄れ場の乃々く致せ
との之状も重札(毛)一致せ
何と北(向)の書を毛状と致
且一二年の間に書も状と
不似との(此)身の尾切と致
せしなり

重札一己(う)きぬ(今)書も
かき(り)れぬ(向)の書

一重札を復(原)半返(繩)の末
と(毛)一揃(子)して(左)の手で
繩の中程を拵(り)たる(中)や
繩の事を(き)ら(か)も(中)や

凡五十三ヶ条畢

小笠原大膳大夫

長時

貞慶 貞成 貞宣

之成

苗流書方口傳書

一網無山海杯の形書を看(る)
時(に)大結を三(つ)指(さ)ま(き)て(足)
結の布を茶指(の)る(は)括(こ)は(傳)
人は(復)ま(ま)と(大)結(一)筋(を)ゆ
ひ(揃)て(復)ま(ま)苗流(を)り
神傳(方)にて(大)結(一)筋(を)鞆
の紐(子)通(し)又(又)あ(り)常(へ)る(る)
渡(ま)く(苗)流(の)法(に)致(す)流
を(傳)來(ま)は(傳)

一見(る)人(指)あ(ひ)を(延)て(大)結(を)
三(つ)指(さ)揃(え)く(毛)三(揃)を(中)指
茶指(少)指(ひ)き(足)半(付)
たる(結)を(茶)指(と)少(指)の(間)
括(こ)た(二)糸(の)足(は)大(書)小(書)
と(毛)形(書)の(時)の(指)あ(り)
第(身)を(全)書(は)大(結)を
茶指(の)る(括)こ(は)傳

色のなり

一 調息止揚を後を河大徳を
わぐー 右の指より三指大徳
先を守斗も出ー 腹を下
是ハ 腹新き出ー 腹を
手をかーと云

一 架よつたき、腹腹を半人
を人、を上の腹ハ右のこく
腹をくくつらにこりて為
大徳を引のわせ上中半
とて中半ハ中腹下半
ハ下へ大徳をくくつら
腹をくくつら又ハこくつら
大徳を架へお腹てくくつ
半ハくくつら

一 腹よつたき、腹腹を半人
を人、を上の腹ハ右のこく
腹をくくつらにこりて為
大徳を引のわせ上中半
とて中半ハ中腹下半
ハ下へ大徳をくくつら
腹をくくつら又ハこくつら
大徳を架へお腹てくくつ
半ハくくつら

がらを腹ー 腹の方目、を
いこあまー 腹を居られ
とく中腹ー

一 腹よつたき、腹腹を半人
を人、を上の腹ハ右のこく
腹をくくつらにこりて為
大徳を引のわせ上中半
とて中半ハ中腹下半
ハ下へ大徳をくくつら
腹をくくつら又ハこくつら
大徳を架へお腹てくくつ
半ハくくつら

鞭渡ー 上輩ハ鞭ヲ
先ニ渡ス
上右手ニ鞭ヲ本ヲ持テ
中ハ鞭ヲ本ヲ立テコシテ鼻ヲ
上ニテ整ル
中鞭申テ右手右手ニ持

鞭を腹を腹を半人
を人、を上の腹ハ右のこく
腹をくくつらにこりて為
大徳を引のわせ上中半
とて中半ハ中腹下半
ハ下へ大徳をくくつら
腹をくくつら又ハこくつら
大徳を架へお腹てくくつ
半ハくくつら

らう、自分も、才を、退言
かゝる事、目をもあつた中
座へ、まゝと、習を、見送り
とて、鷹、見、り、ものや

一 聖、習、物、集、の、年、大、習、の、
まゝ、と、習、も、外、向、(まゝ、と、
習、) 雀、習、と、因、年、一、見、習、
や、見、習、悦、哉、ハ、まゝ、り、も
約、も、内、向、は、物、集、ハ、は、借

一 鞭、子、ゆ、け、を、付、架、(鳥、皮、
大、習、ハ、鞭、を、内、(ゆ、け、外、)
見、習、ハ、鞭、を、外、(鞆、内、(見、
) 中、に、懸、り、ま、の、
習、大、習、同、お、見、習、悦、哉、ハ、
見、習、子、同、一、見、習、身、の、内、
ハ、雌、雄、と、只、大、習、見、習、
同、お、大、習、の、雄、を、見、習、
と、り、大、習、の、雌、を、見、習、也、

見、習、ハ、雄、鶴、ハ、雌、ハ、雀、習、
ハ、雌、悦、哉、ハ、雄、ハ、是、や、
一 あり、寸、法、二、尺、寸、一、尺、寸、一、尺、
寸、は、三、段、ハ、習、の、お、ち、ハ、接、
か、一、何、も、者、を、用、由、中、切、そ
き、り、して、只、ハ、柄、移、鼻、と、て
麻、草、を、云、六、分、計、る、後、何、も
三、れ、を、水、あ、り、と、り、

一 鞭、皮、ハ、雀、習、を、若、や、付、ま、
存、在、と、お、ち、の、中、を、持、後、ま、
因、年、の、中、ま、ま、か、黄、蛇、子、存
方、ハ、お、り、と、ま、ま、と、り、セ、ハ、種、
見、一、ハ、中、下、草、ハ、下、ま、と、り、
セ、ハ、主、人、ハ、た、の、ま、の、内、
お、ち、の、中、を、ま、ま、と、り、セ、ハ、鞭、
の、中、を、持、く、種、ハ、よ、や、見、人
と、り、お、ち、ハ、お、ち、の、先、を、持
と、り、鞭、の、中、の、先、を、持、後、ま、

二寸を位よりして一丈より
 下の布下は上白と紫の
 折交の大結申、浅黄と紫
 の折交又、紫と紅の折交
 又、黒と白と下は足草更
 草大結、紅の折交、黒更
 黒更、二大結、紅を不入
 多色白更、子、紅入を用ひ
 大小更とをこき人の更、二
 足草と足草、子を用ひ、化松
 草とも同也

一 更、子、足草、指、大更、と
 踏と、雀踏、ハ、身、号、より、外
 向、指、也、大結、足草、更、
 とも、上、前、より、指、也

一 足更の足草と、児踏、候、哉
 の足草、ハ、身、号、より、内、向、
 指、との、内、向、向、と、云、ハ、足

草を小櫃の草、身、候、の、も、
 一 大更の足草寸法の事、を
 候、どの、け、七寸、二、方、大結、の
 寸、二、尺、身、之、見、更、ハ、更、取
 更、取、も、身、二、方、大結、の、寸
 法、ハ、二、尺、身、之、是、ハ、直、法、の、寸
 法、也、唐、より、後、一、身、中
 足、結、の、寸、二、寸、三、寸、ハ、更、
 物、取、れ、ぬ、由、世、大結、の
 寸、尺、を、七、寸、延、る、大更、ハ
 六、尺、二、分、足更、ハ、五、尺、二、分
 更、ハ、四、尺、二、分、是、ハ、中、比、より
 の、寸、法、也、是、を、收、束、大結、申
 くと、目、下、に、一、寸、半、定、る、寸、
 一 天、の、物、の、半、引、切、旋、子、ハ、大更
 子、用、ひ、見、更、ハ、瓶、子、と、と、り、
 小更、子、と、と、り、子、旋、子、あり
 更、を、と、り、身、号、人、ハ、何、を、用、ひ

と流判を判

一 架子まき木スルテの串 阿膠アノ木
杏の木アノ何と削て用ひ是
烟夕紫架アノ病習アノ足杯
痛アノ揺骨木アノ用ひ習
の糸アノ是ハ庭麻アノと云木
架のちアノ六寸アノ五分アノ也月形アノ
削アノ上アノの方アノを丸アノくアノまアノや
只アノ所アノ外アノ苗産アノ木アノをアノ合アノぬアノ人
ハアノ松アノのアノ木アノをアノ用アノひアノ燧アノ火アノ杯
のアノとアノ好アノ解アノ入アノ鬘アノ入アノ子アノ習アノ
つアノまアノきアノこアノえアノやアノ架アノ子アノハアノ桐アノの木
をアノ架アノ子アノとアノぬアノこアノはアノ河アノのアノ響アノをアノ
ぬアノやアノ

一 架の寸法アノまアノ六寸アノ五分アノ守廣
はアノ六寸アノ六寸アノ増アノくアノ出アノるアノ横アノ木アノ所
二寸アノはアノ内アノ子アノ指アノ架アノ産アノ架アノのアノ習アノ
をアノ習アノのアノ書アノまアノまアノ

一 結架の串 横木を習アノ木アノの
外アノ苗アノとアノ末アノ木アノのアノ結アノ目アノをアノとアノ
切アノ木アノのアノ結アノ目アノハアノ下アノきアノ結アノとアノのアノ
繩アノをアノ二アノ重アノとアノしアノ一アノ重アノ結アノとアノ
切アノ木アノのアノ方アノハアノ習アノのアノ才アノとアノ
外アノはアノ一アノ解アノ入アノ鬘アノ入アノのアノ
苗産アノのアノ結アノ架アノハアノ一アノ重アノ結アノとアノ
二アノ重アノとアノぬアノとアノのアノ

一 葬礼の時七点目アノのアノ習アノ
をアノ殺アノもアノ事アノ習アノをアノ居アノてアノ葬
礼アノのアノ付アノとアノ濕アノ藤アノのアノつアノより
火アノ屋アノのアノやアノのアノ内アノ入アノとアノ交アノ也
紙アノとアノ習アノをアノ北アノ向アノ子アノ物アノ引アノ
道アノ守アノ經アノ文アノ紙アノとアノ習アノをアノ放
とアノくアノ足アノ草アノ白アノ紙アノ大アノ結アノ白アノ
架アノハアノ結アノ架アノとアノ推アノりアノ御アノり
架アノ木アノをアノ苗アノとアノ架アノのアノ末アノ木アノ
方アノよりアノ結アノゆアノとアノのアノ葬アノ礼

字くくすくしく云々 時移る

一 遠山落と云ハ 野山とてその
まきく引く云云

一 丁より七言と云 詞ハ 魯多とて
とく 追つる云 大魯より 申る
詞あり

一 涙ふけに かけすと云 詞ハ 魯の 岸
より 引くと云 詞や

一 野山とて 雜子 此を 師と 呼ぶ
流を 引く 詞あり ありと云

一 一と云 詞ハ 魯の 岸
一山の 洞奥を 言ふ こと あり

一 魯の 足跡 言ふ こと あり こと あり
とも云 魯 岸 岸 流と云 左の
時 魯 岸 岸 山と云 山 岸 あり

一 野山とて 雲の 詞ハ 魯と 散文と云
申の あり 日 云 あり あり

一 野山とて 雲の 詞ハ 魯と 散文と云
申の あり 日 云 あり あり

云や 分 出 あり あり あり

一 魯の 追 跡 言ふ こと あり 遠見
は あり あり あり あり

一 遠 山 言ふ こと あり あり あり

一 洞 窟 言ふ こと あり あり あり

一 山 言ふ こと あり あり あり

一 山 言ふ こと あり あり あり

一 山 言ふ こと あり あり あり

一 山 言ふ こと あり あり あり

一 山 言ふ こと あり あり あり

一 山 言ふ こと あり あり あり

- 一 稚子をん投よと云ふと云事
いさを返ちて弱有る
く居るうく居るをいふ
印をうくうんどうと云ふ事
んをいふあり
- 一 起りわくれのものをあそび
云々一 世をいふこといふこと
一 山と云はるに一ツと高の事
あり物れを子初めとむなり
を儲と云や
- 一 床の習ふことを遠くして
返ちてく本居るを返切
さる習とくの見ると切とみく
返切する習うそいかに床見
うる習とんておれ引け
やうかいたことあり
- 一 何の本そと本居るを小
まに羽ひけたこと云ふを

返切の事や

- 一 ちとと云はるれを返ちて
事や
- 一 ととと羽折と云はること
遠く羽と云一 雨事と云
又羽と云一 返切のことと云
度と羽折と云すべし大習の
初は是は白きよは限初や
一 けがさると云はることを
よ
- 一 どんをけんだと云初習十所
斗を返ちて云
- 一 ちととととと云事いさをよが
ささくかあははるの事やうく
おをせると云や
- 一 草を返ちてはるの草まを
を返ちて云
- 一 ちとととと云はるの草に入

凡そ半を云又鳥を返して
往を凡そひたるをとも返見
其の半を云

一 往を云半は半を返して往
投す

一 かせ支羽とさゆを返して往
つ子ささ成る引射を返して
冪さいをさちく誠を責る

一 一も羽や

一 さりらんを云はる此は
わを云

一 入り出と云はれ奥へ入りと云

一 出山と云はゆる半を云や

一 の向り宿ると云はれ雉子を能取を云

一 おまけはさひ入と云はれ木松の中へ
飛入

一 往と云はれ宿るを返して山の往
がし居るあり

一 往のひまを返しては宿の往より
さのよりを云や

一 宿の宿の宿を返しては宿を
返しては宿ると云

一 かくひと云はれ二方と云は
せく方と云はれ一方へ宿を立
せり方を二むと云

一 宿れ上りては宿羽は羽を返
むけは宿ると云や

一 往つめ宿るとは宿中より宿を返
たるを云たり

一 せんそうと云はれ雉子のいまは二宿
もく川中を返して宿を返ると云

一 往つめ宿るとは宿中より宿を返
たるを云たり

一 往つめ宿るとは宿中より宿を返
たるを云たり

一 往つめ宿るとは宿中より宿を返
たるを云たり

一 禮のきい食と可子管交ぬ
ものや 不知とく喰ふりとも
禮のきと中附いきなりと
らく管とのや

一 禮の好儀の儀法教を法とす
胸より大徳を載ささばさ
後より心を實とて礼とする
一 禮通(きり紙)はき問九
尺禮と去たのきとく意を
伸とく相持寄とく儀儀のき
後より能知よかほや 禮通は
手紙教を實意を寄相教
を撰よりきとく是れ法を而下
よ重はち力をさす一下よ
至るべきを突所礼や

一 禮通の礼の教を授れ之禮
振とく言との時をくはさく
と下るべきぬ 禮通とく

教を授や

一 ち力より禮法附のち力 自給を
是と持来とく是との問通
り後一禮の禮通と括を
先きを授と後より禮を授
との禮通は廣る(通との)
一 即禮の儀より礼(入る
ものや)授けらる(とく)
至る意を云後附はとく
と後こそ重を細成解因を
見せらるや

一 禮のきお儀の時人より持せとく
胸をを載ささばさなり
五とくたより至る礼や

一 禮通(酒)は儀のき 是を
看より居とく出候はとくは
禮(一)とく(き)の禮を居
内こそは(き)居かるとく

一 鶴の身は白く、先大鶴と掛目
して、少鶴と云ふは、
細無の先、全身、
整う、右の時に、
足も、

一 鶴の身は、
先、
足、

一 大鶴、
二尺七寸、
一、
二、

一 鶴の身は、
先、
足、

一 二、

一 次、
一、

一 一、
一、

一 一、
一、

一 一、
一、
一、
一、

之折也此は兼と云也

一七方の鞭を信付身骨の羽を
二寸極身先を一寸極尾を一寸兼の
中より尾を一寸極身骨尾
を一寸すわめ身先を一寸極又
身骨尾を一寸極之信を以て
身骨先代羽を鞭を一寸極と
身骨を一寸極尾の鞭を一寸
よて凡そ一寸極身骨先とあ
てる是七方此折也鞭也

一併指の毛をけいこす折也
一寸折の毛の人の生鬘の中よ
りとあけるを併指之三方の小は
よ折るは人のあり

一指竿より竿山北竿と云事
五曲也人指す付の竿と云
左一山の竿といゆは六つ折る
一指竿にゆは折るは六つ折る

林の下のまきと云事

一りす折はる竿を折るはそ
ゆは折るを折る是礼也

一折竿末よりまき末北目す
了は申卯寅三す折る也

一各段提ぬ折るは油を提ぬ
に海を折也

一病骨解分事と捨ると云りの
なりすか付といは葬礼の折の骨を
一折る道野(出必唱文の事)

飯命日天子 本地勸世音
為渡衆生故 普照四天下

一称一礼者 滅罪除苦惱
現世大安穩 銷終任正念

一折るを折るは凡そ折る折る
由呪法より大徳を折の中は折る

折るは折るは折るは折る

まき折るは折るは折るは折る

上者梵天帝釈下者由大天王殊
諏訪住吉大明神卜唱

ふゆさし 五免一あけ子手衣

きーとをたれとをを深ん

一 十二月廿二日

正月二日三戌四未五卯六子

七酉八午九寅十辰十一申十二巳

一 飛鳥塚と云い小鳥をとりて

子のまゝ又い首かつこよか

よし身の小鳥の足と指を

おろし子木のもちて

いふや

一 架子用る木極 幸柳へけ本

湯木へ又厚子 架へて喜

極夏極秋 楓や松を

用く 横木白膠木へ又相生

此架へてまゝ 楓や梅極秋

楓や松を

一 横木白膠木を用る

一 横木を横木を用る

一 横木と外を用る

一 横木と松梅極を用る

一 横木を用る

一 横木を用る

一 横木を用る

一 横木を用る

一 横木を用る

一 横木を用る

一 横木を用る

一 横木を用る

一 横木を用る

一 横木を用る

一 横木を用る

一 横木を用る

一 横木を用る

一 横木を用る

子の扱也

一 外架の肩長を乳色にする
主人書院より以流此時の肩
縁縁より流此架の乳色す
魚一

一 臺架外架を木の色を主
の方に向ふ又横より木の中
まへの太く竹にて架する
と架一車や

一 苗産の臺架時に其を架に用
例もろ大徳の先を臺の丸の
方(下)引延く其の葉押込
度其ある所守魚一

一 架衣は半尺は足木に施す下
二寸三分の頰纏を付る色
浅黄又ハ柳深きとして家紋
又ハ字を付る傷ハ架の内
二幅二幅とする上は横釘して

下は豊則之架下寸徑を何
徑ともむく又編衣と云ハ草
麻草と云ハ編架岳と云ハ
之ハ苗産の架岳と云ハ流
流以勝分と云ハ草と云ハ
之用の何を意を表す是を
云ハ此云ハ此衣と云ハ

一 大徳の臺架ハ半尺為四寸
為ともハ草の徹在焉又十
寸或ハ七寸ハハ繩よりハ
糸を以て利を徹双ハ其を
虎草と云ハ又虎の徳園の徳園徳
ハハハハハハ再方此徳を云ハ
の痛と云

一 經子卯向此經と云ハ經は横
成と卯向と云ハ成を内向と云ハ
海此經と云ハ金銀の經ハ十
寸厚相と云ハ是之經納と云ハ

一 一階衣 紫身より白練 紫生糸生糸
 生結 紫身より緑色の衣を用
 形物 此不取柄へ 紫身より見身
 之結を用ゆ 上古に大小身何れ
 紫色の柄條の布を用ゆ 由代結之
 一 帯 紫身より尾 一色に外衣
 同分 紫身より小片 尾 用 和成結を
 好より尾を揃せ さらば 尾より
 一 袴 袴の長さ 大身より一寸三分幅分を
 狭くする 之身より一寸一分幅分を
 狭くする 八分幅分を 何れに定れる
 狭くとの身より 狭く 何れに定れる 度
 尾より尾を揃せ 一色に地衣の
 一 袴 袴の長さ 大身より一寸一分幅分を
 狭くする 之身より一寸一分幅分を
 狭くする 八分幅分を 何れに定れる 度
 尾より尾を揃せ 一色に地衣の
 一 袴 袴の長さ 大身より一寸一分幅分を
 狭くする 之身より一寸一分幅分を
 狭くする 八分幅分を 何れに定れる 度
 尾より尾を揃せ 一色に地衣の

一 袴 袴の長さ 大身より一寸一分幅分を
 狭くする 之身より一寸一分幅分を
 狭くする 八分幅分を 何れに定れる 度
 尾より尾を揃せ 一色に地衣の
 一 袴 袴の長さ 大身より一寸一分幅分を
 狭くする 之身より一寸一分幅分を
 狭くする 八分幅分を 何れに定れる 度
 尾より尾を揃せ 一色に地衣の
 一 袴 袴の長さ 大身より一寸一分幅分を
 狭くする 之身より一寸一分幅分を
 狭くする 八分幅分を 何れに定れる 度
 尾より尾を揃せ 一色に地衣の
 一 袴 袴の長さ 大身より一寸一分幅分を
 狭くする 之身より一寸一分幅分を
 狭くする 八分幅分を 何れに定れる 度
 尾より尾を揃せ 一色に地衣の

此草草すまのや

- 一 靴は草すまの二尺八寸又二尺八寸二分も靴花一寸茶すまの剥靴とく友の上皮を去て用黄すまの皮を縫用時の時を兼と海皮をもろ見す三尺二寸靴花一寸踏二尺三寸靴鼻を寸見す二尺二寸靴花を雀踏鞋二尺八寸二尺九寸又二尺七寸五分靴鼻五分見す靴花を寸用すすまの靴花を寸用す
- 一 草すまの皮を寸用す是は靴花の時を寸用すは靴花の時を寸用すは靴花の時を寸用す
- 一 靴は草すまの二尺八寸又二尺八寸二分も靴花一寸茶すまの剥靴とく友の上皮を去て用黄すまの皮を縫用時の時を兼と海皮をもろ見す三尺二寸靴花一寸踏二尺三寸靴鼻を寸見す二尺二寸靴花を雀踏鞋二尺八寸二尺九寸又二尺七寸五分靴鼻五分見す靴花を寸用すすまの靴花を寸用す

- 一 靴は草すまの二尺八寸又二尺八寸二分も靴花一寸茶すまの剥靴とく友の上皮を去て用黄すまの皮を縫用時の時を兼と海皮をもろ見す三尺二寸靴花一寸踏二尺三寸靴鼻を寸見す二尺二寸靴花を雀踏鞋二尺八寸二尺九寸又二尺七寸五分靴鼻五分見す靴花を寸用すすまの靴花を寸用す
- 一 靴は草すまの二尺八寸又二尺八寸二分も靴花一寸茶すまの剥靴とく友の上皮を去て用黄すまの皮を縫用時の時を兼と海皮をもろ見す三尺二寸靴花一寸踏二尺三寸靴鼻を寸見す二尺二寸靴花を雀踏鞋二尺八寸二尺九寸又二尺七寸五分靴鼻五分見す靴花を寸用すすまの靴花を寸用す
- 一 靴は草すまの二尺八寸又二尺八寸二分も靴花一寸茶すまの剥靴とく友の上皮を去て用黄すまの皮を縫用時の時を兼と海皮をもろ見す三尺二寸靴花一寸踏二尺三寸靴鼻を寸見す二尺二寸靴花を雀踏鞋二尺八寸二尺九寸又二尺七寸五分靴鼻五分見す靴花を寸用すすまの靴花を寸用す

小の蘆草 ちり屋の深草 直生
小の蘆草 ちり屋の深草 又其
は草の白生よと此草

一 山は徳と云物に草繩くくする
わくはし草管を入るも草管の
條と云

一 旋子の夏合流志洞又の洞用象
牙まくするに引切矢筋を草
管に用極草を主 靴子天竺也
とち子に晒や竹を極草を山と
とをうと云是の草管は時彼極草
かり

一 條北草 草管ハ七尺五寸六尺三寸
又草の房二寸見草ハ四寸
草管ハ五尺五寸と見草ハ四寸
草管ハ四尺五寸ハ寸と房寸
草管ハ三尺又ハ二尺五寸見草
二寸草ハ四尺ハ寸ハ草管ハ

二尺五寸見草ハ七尺五寸六尺三寸
同見草ハ六尺五寸同草ハ八寸
二分草ハ草の色黄草多や深分
山頂ハ赤紅白草ハ草管ハ
一 小櫃の徳結草ハ寸ハ草ハ草
草管ハ草管ハ寸ハ草ハ草管ハ
二寸ハ草管ハ寸ハ草ハ草管ハ

一 化草の夏大法を纏ふ草ハ
草管ハ草管ハ寸ハ草ハ草管ハ
草管ハ草管ハ寸ハ草ハ草管ハ
草管ハ草管ハ寸ハ草ハ草管ハ

一 解合子は志解を入る物ハ形長
廣而のこくハ柄の長さハ寸草
草の目を照る

一 解合子と云物ハ梨梅ハ木杯ハ
削ハ先のこくハ寸ハ草ハ草管ハ

草を文く二様子扱也古法ハ
罽毘一尺を角 乞繩と云はける之
長さハ相子揃て 罽毘之長三尺
とすする内々ハ 大子ハ相子を
繩と云はく 出くき乞繩と云

一 首玉赤赤黒の之繩 打交うとく
長さ一尺三寸とく 繩を二ける事
即或之罽毘大子是繩ハ相子揃ハ
相子揃上と平子揃して 竜馬を
一尺四寸ハ 相子揃ハ 相子揃を
引返ハける 繩を扱ふ也

一 甲乞と云ハ 設大子 履を穿る事
大者ハ 大子用ハ 虎大子 虎大子
長子 二尋ハ 七尺 寸又履を二尺
寸とすするともう 大子 虎大子
是を扱をすこと云 履ハ 繩とく
人のいハ ぬ繩ハ 大志尾を引
のハ 切らや

真成

寶紀源記

神皇正統記(後醍醐天皇) 仁徳天皇
八指七也を多もも 毛流ハ 皇孫の
年白く 皇の家に人といふ者白
ふの寶ハ 文字を扱本すことハ 甘
三月十日 宣の年 宣の日 宣の時
御方の御方ハ 御方ハ 御方ハ
日中ハ 御方ハ 御方ハ 御方ハ
とんのとんと云ハ 御方ハ 御方ハ
日中ハ 御方ハ 御方ハ 御方ハ
とよとくいハ 御方ハ 御方ハ
と更ハ 御方ハ 御方ハ 御方ハ
いハ 御方ハ 御方ハ 御方ハ
かかハ 御方ハ 御方ハ 御方ハ
御方ハ 御方ハ 御方ハ 御方ハ
せいらいハ 御方ハ 御方ハ 御方ハ
御方ハ 御方ハ 御方ハ 御方ハ

ら山はゆる山におも
をきをかり夕子友松
四乞してちるを仍敷
山とをかり

舞はくふ更母の村付
上りしるも久しかり

鳴らふくもふかき持
あけの舞のあまもか

わひといふ舞の函の
舞の細き存て重なり

但しちかくもこれあ
舞を細無とすなり

又赤毛の舞しき事
か虫も赤く凡逸

物に赤舞とすなり
昔母舞を挽きしれ

て忽毛紅く成り物よ
挽きを投ねしりこれ

紅の舞ももやふあ
と云舞りし白舞の

れいし紅梅に成る葉
舞とすし仍白と曰事

尺さなり

まのまはよ遠山さの
長しけか舞の推也

肉たうくてををい
るに犯すを肉のさ

中へ渡りて肉を引
やく

大素の舞とてせむら
草てししたるもか

あまの如踏せしは
舞のまも利しあ

なる舞のなまやよ入
夏にお月ひるし七月

はるなり十宮の生る

急を煙雲にして夜出
たり仍若翁と云一説也
又波斯也よりむいといれ
る語と云字をより翁と
讀み故この倡きたるに
手は留るなり

所敷はむも自らも思はば
こはしきぬ葎翁の若翁
種族ははは有る事あり
種族は鶴よりしてあいな
翁あり大翁あり室籠
として早稲の籠まはこ
小翁にあきて下子の翁と
なるものなり

誰かし大の乃よもとをれて
翁を介物とせははの持人
ついで別とる身大の乃を
ん知くるとを立しはは

柳也ハ翁をばしてと
かやなり

何代も志とこありそり入と
かろ持場の花はとこせん
こあるとい語のここのる
まか花あがるや

柳はるか花よりこのむ翁は
るは袖より花をこ白く
うちつけはやうして大花翁は
山口あつくとるいけりなり

うちつけははねら回車や
つこはるあふよく歯をく
山口は山口の神をえなむ
女を入るく山神をえく

あかくに花持のん少翁は持
翁の身を花あふくこと
うましきよ只一ちにそり翁
とて年よりけりはは翁

みくら世あつらひよ見ゆるおれ枝子
いくしきりのなうはうん

おれ枝の志業を母うりちきて
くしゆり持より音しつ

夕霧子よりしきりあつらひよ
そりし世見い又翁をん

そりし世見い物くきをそり
はくはく事や云又海を

ゆえにたの解のまゝ何と
やめり

身もまゝ本居るいよけの落部を
そりし世見い物くきをそり

後師より飛んて草よ
ゆりくまきま後師や

そりし世見い物くきをそり
まゝしてかゝりぬこりあつらひ

そりし世見い物くきをそり
そりし世見い物くきをそり

そりし世見い物くきをそり
そりし世見い物くきをそり

そりし世見い物くきをそり
そりし世見い物くきをそり

そりし世見い物くきをそり
そりし世見い物くきをそり

そりし世見い物くきをそり
そりし世見い物くきをそり

そりし世見い物くきをそり
そりし世見い物くきをそり

そりし世見い物くきをそり
そりし世見い物くきをそり

そりし世見い物くきをそり
そりし世見い物くきをそり

そりし世見い物くきをそり
そりし世見い物くきをそり

そりし世見い物くきをそり
そりし世見い物くきをそり

そりし世見い物くきをそり
そりし世見い物くきをそり

そりし世見い物くきをそり
そりし世見い物くきをそり

そりし世見い物くきをそり
そりし世見い物くきをそり

そりし世見い物くきをそり
そりし世見い物くきをそり

そりし世見い物くきをそり
そりし世見い物くきをそり

そりし世見い物くきをそり
そりし世見い物くきをそり

そりし世見い物くきをそり
そりし世見い物くきをそり

大個呼てしるしり人

のそくくもやまの身をばちや
みまらう何と思ひつら

のそくくもにちのま

このそくくも見るとい

身を通にちひ身は身を

いふ

以将人せられそ身は山より

あししよよまますてり

世をれとい山をちけくを

くくくく縛る身をのま

昔身をいふの身あり

世を生まるとい葉うわて

子の時よりけちかしくま

るに葉身をいふく南子が

世をいふといはす

たーはてそことまて見ん

う多神の傷の音の響

うく世に和めなり

まをくぬ世の身は山より

はあふたう日れとまらね

世編もまく身をいふ

いふ

まけをいふるなりあふ

まをくくく山額の相

あき風とい草の足名

海よりあり風とま

まをくくく世は花

月のふりぬ山より

山柄といやう

山柄傷も君うなり

ちとせの日はたて

松の枝は多葉を

いふ

まをくくく角の柱にか

山奥のまをくく

たかきよとほたかあり延
長の内門の内付風聲の
たの極を西く山奥の内
そ極をまへを路一
う今今の世と風聲のた
の極か一極のたいまえ
ち極を才ありとまへに
極取のけりる極と
草枕ゆへにちのこまあり
うの極場を極のうも
かまよの極のまきまを
ののの極を極し定た
たまきといたうこま
まきとま又極とま
極あり
氷室山麓の系のか極あり
田舎もろふありとみる
社風したまの極のけ極

やそ吹くままの極人
け極とまを極をま
てまをままを極をま
夕はまの秋の極の草とて
ちまの極の極の極
草とまの極の極
け極とまを極をま
一よりにまをかぬれ極
極もまの極の極の極
たまかまといま極
と二極一より二より
まへ又極と大極をか
つけく極を極を極
の大極の極と極の極
け小極と極の極を
列でか極と極の極
見よつて極を極の極

と市之秋之大直るよいかき
初之枯葉 鶉之秋あり
けてわが鶉の泪や

をのうよは鶉の木のちのちやん
まゝる鶉の人をすくひ
木のち鶉雛子徳を回
なり

こゝ鶉のまゆをむかふ鶉
たねようつら 萩むむら
回前

秋を雲をむ玉萩女房む
うらま(も)とと世辺の鳥
ふくやまたちむととと鶉
一羽うまは足徳を回せ
もとむるま 前ま
まむむすむむむあり
鶉むむむ

云雀入川中道の高萩鶉

もかよまるとと 秋のまこり
夏鶉の子をそとそ
枯れふゆ(よ)秋の原見鶉
とやと鶉の雄あり 見鶉
見鶉とまこ

宵のまふゆあきとと 鶉のまこり
胡蝶ももも 鶉のまこり
鶉のまこり 鶉のまこり
とと 鶉のまこり 鶉のまこり
とと 鶉のまこり 鶉のまこり

遠くまふまこり 鶉のまこり
まふまこり 鶉のまこり
まふまこり 鶉のまこり
まふまこり 鶉のまこり
まふまこり 鶉のまこり

鶉の上も下もをまふまこり
まふまこり 鶉のまこり
まふまこり 鶉のまこり

宿をさうしそとて尾のよ
ちびと云草のふと成を
板て山の神とある事と種
子も所大尊も何とも
氷ける雪のり場の夕暮る
いろついでつる首川の
将之を交せしむの山
なげまのそとて折せしつ
お山とい山の奥へ踏ん持
て出さくまきれい入出つ
入川もて折る草をきけく
折せしめり
むまふしき首水もく氷ぬ
雪をふききく雪やうほ
有るを血のくまを失
ひるの小豆を何こい替
をさまししてとまら
おまふてかかくる落れおれ

名所の色花よりあつ
ちを迎ふぬ根根折せし
雪かむるもく色の紅を
おまふて折る雪の
折るもり
山をさしふふ折れり
泪の言もあつて
あつて折れり
足も高き落れしや
大個の長やうけり折れし
そいさる雪もいりてみる
大個大の折れしをさる
まを折る雪を長が
と云く是をやう折れし
いりていぬや
あつてさう折れし
そいし折れし
なげまとい地もあつて

てきを投まり

落し草投投まてこもて

くつりまを羽をまてめ

大けかく初まりぬとゆ程よ

本そりしふ初まりもむや

大けかくこいなるまて大の

ゆありたりもやぬとま

羽のまやると大と初まりに

通てまへふかくてま本

まよるや

投ぬるまをい煙まきつ

ゆくまこのまあるいこり

世かいたまあはまきのま

あまもると再てまよれい

とくまきまくとくは初めの

初めの投まりとまよる

うて射て初まりとまや

本まきあれ投おけ初て

けきを投おそれかくかく

あまのりくあまのりくあまのり

初めの初まりとまよる

あけかく初まりに初て何

らまかかくあまをあま

まむとまあり

尾のまよる初まりとまよる

まゆりにけりまを初め

初まりにけりまを初め

まよるとまよる初まりとまよる

まよるや

のひやしらあまの初まりとまよる

羽まきをまよる水跡ひま

のひやしらあまの初まりとまよる

初まりにけりまを初め

まよるとまよる初まりとまよる

初まりの初まりとまよる

あまの初まりとまよる

白尾はく事く一尾虎の伊
字の平山持の齋古山を
むいせく守るあー四
れい海正頼の上の尾二ま
く白く尾ま〜種より
齋の尾のこの白くを
まをまはいま〜言め
心正頼の家二尾の尾との言
去れ〜心正頼をまの
非なく〜侍りけい
去〜尾をまはなり
包かくま業をり〜山風
ま〜かくま〜つて定め
たま〜かくま〜かいた
あ〜同輩〜種子の崎を山
少〜種ま〜つて流の
子〜云おを流〜つて
流のた〜ぬれ〜つて齋を

正〜くあ〜物ま〜金羽
る〜ま〜ま〜ま〜や
流〜ま〜い〜子〜羽〜
そ〜を〜持〜か〜い〜ま〜持〜付
を〜い〜ま〜ま〜や

羽の業路流より 鶴

たま〜す〜ま〜ま〜ま〜ま〜

春の物〜ま〜ま〜ま〜ま〜

あ〜〜ま〜ま〜ま〜ま〜

赤利羽赤世ま〜ま〜

後ま〜ま〜赤利羽の赤あり

世〜ま〜ま〜朝〜ま〜ま〜

第齋のゆはか〜

大の流移より〜物ま〜

あ〜〜ま〜ま〜ま〜ま〜

ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜

ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜

ゆ〜ま〜ま〜ま〜ま〜

隠て詠ふりまをり
 霧かす秋の朝ゆくの小窓に
 玉のしるしを神を
 雲霧の流横たのこり
 さらさらと
 こもけりこえと
 霧を
 霧を
 霧を
 のれぬを

定家問答

史書に世の政事
 上乃を和布民を
 お道の抱負あり
 伝りて
 去りて
 て雲の紫の敷
 終る事
 一の房を
 けはを
 一く
 村の
 戸を
 流る

よこをれ御有く入給ふを好
何と云き相許あり相言ふ所の
いそひを風よ山中よ見け入る事
あやむる所の云々一比とて
一及し室をす侍の一とて室御
これと同なりて後世のあまこと
志侍とてそれいまふ所のい
志屋あま江のいそひ今
秘しるよなまふといふ

一 唐の日本へ渡る事何世の法代や
昔人皇千七代仁徳天皇の御時に
始て唐より貢とてこれ唐の初
神代と言はれるといふこと
似れは中界一とて武内の子
名附といふといふ

一 初て渡る唐の名を身とて
後多とてヤ年る大玉とて後多の
中より物まゝとて後多紀が取

智山(故さうく)は西南の唐の
根中なり

一 唐より唐を持渡る人いふ唐朱
光と云かり倭と云こと也何と云
唐唐を尋ねてもあはくは
さる所こらくと云唐女を流し
尋ねたこと五(功)付(小竹)の
也(唐)の身を與(か)るより日本
唐の唐也

一 二度目は唐より唐を身とて唐の
名をかり唐とて唐之人皇千代
神明天皇の御時に此唐を唐山
(故さうく)今(唐)土果の唐とて
け唐の身也又(唐)よ(唐)の唐
唐よ唐の唐と約むると七月七日
子(室)を唐の唐とて万(物)を風とて
唐よ(唐)の唐も出(唐)る
唐(唐)より唐(唐)れ来(唐)りて唐(唐)を

澄や

うい〜天〜と三度唱へて

恙意の今と心の如く身を

〜あり〜等に

又二下はさうやぎの鞭としてよぶせに

三つは身の方へ皮鞭を指南で

物を唱へて身の方をかく〜ぬ

ついで又身を唱へ

これとちかか〜夜更の朝也

井まればもうかろ小竹一うの

一 ぶつの子とくちいなる音とん〜

〜わ〜春の顔見。白小鳥。赤小鳥はこ

一 二つの子とくちいなる音とん〜

こもはるる〜こ〜か〜と〜と〜

こ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜

〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜

一 身よりしたる聲の響る事

なる音身を呼まはる日如米油は

とて所むんんの二字を合こ

初身いぬの字跡いぬの字身と

うんの子を合むこいつ世の身と

皆似神也

一 葉草のみ〜か〜け〜と〜事ある

音云なりむ〜春日の粒の粒の粒の時

仁河天皇より傳へ給ふ〜葉草ある

の上と〜葉草は掃き〜り〜身よ

一代あやまりか〜報信也

一 身より〜事ある音これ山響る

の時雄の音と〜雄の飛て来ると

身と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜

西雄の身と〜と〜と〜と〜と〜と〜

中身陽調なり

一 源氏の三つの子とくちいなる音

を法の秘は〜光原氏に〜と〜種と

目と〜身をかく〜と〜と〜と〜と〜

身と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜

心の所之秘傳也

一 宋境と中軍なる者昔早題
て世の民悲む帝朕が改革たる
威ありたりとて庭上に朝を積
至車よりこれ業をみ朕焼死
に民悲を降へて天を祈るに
天と感應や玉符いん忽大雨
より江の水も停つてつる人少
車も流るるは早題の難を
随てさると云ふ史より未だ
五年より大書して難をさす
帝の御身代り多かるは是を以
ての救ふより世に車ゆを流す
より國縁これより功也

一 三皇の難子と中軍なる者昔人皇
一代敏達天皇の御宇文野の事
三皇の難子ありて帝を初奉り下
万民よりさすして疫病も其の時

巨文を考ふ世の系三皇の難子
ありし帝に對し悪多き事あり
折より幸ありとて奉りて其の時
角よりて授かるに代り是より
疫疾の難も云々なり其のち
の改を難子のお是と云ふは
改革ありと云ふ

一 足徳の二口と中軍なる者昔
く飛切羽を行ふは切羽なる
後後そ足徳の二口を二口切る
一 虚空の徹と中軍なる者昔
平仁明天皇弟三の王子松の帝
とあり傳ふるに平仁の目
有るは一とありとありたは
獨身の持杯の取直を自他は
羽を飛せんとたむりてさ
の肉をあけはふと云ふ
二 神を以てと云ふ

明の日徽を解くても自然に羽も
一尾元とのこれ第一の分柄をも
引平の履穿の微と名や

一石の重餅と中半角の山崎の時
半より重なるを引して石を二海
むせい多作と包けて重なるむい
あるを名や

一かゝ尾かば尾はあは羽あは
尾はあり羽もさそと中半角の重か
らむと激の重かば重とい重なる仕
入る種の重かりこれ尾はあは羽
あは又尾もさそとい羽あはりこり
目の尾をかゝ尾と云へ又七羽の初を
かゝと名なるこれ尾はも羽も
あるを名や

一足重の天節羽の羽と名なる
重なる用心の重なる足重の羽
羽の羽と名なる足重の天節を

さくらの紋

一胡多持夕とかりと中半角の重
多持の四つあへ夕多持ハセツより
重なる

一喉の重なる逆の重なる中半角の
重なる胡多持北より南取をさ
そこのこれ重なる南取をさそ
えは重なる逆夕多持の南より
北取をさそこれ北取をさそ喉の
重なる逆

一重なるのとり個と名なる重なる
重なるもにもなる重なるをさそくた
と重なる重なる上の重なるたとい本
よりたきそといいふもむ重なるは
重なる重なると個と名なる重なる
重なるこれ重なる重なる重なる
一初重の重なる重なるの重なる重なる
重なる重なる重なる重なるの重なる

種々まゝに白くのみをうけし種々
事や

一 みる結のひねりの中をみる首の
のり粉、雉子の卵の尾のよの油
皮を少しはきの中へ入し事々
一 多は木は木は木は木は木は木は
若くは木は木は木は木は木は木は
楓の松の松の松の松の松の松の
名貴松と云ふ木は木は木は木は
竹の竹の竹の竹の竹の竹の竹の
竹の竹の竹の竹の竹の竹の竹の

一 かくら木は木は木は木は木は木は
萩の萩の萩の萩の萩の萩の萩の
雉子のとくに羽の八重子と云ふ萩の
萩の萩の萩の萩の萩の萩の萩の
一 見ると事々若くは萩の萩の萩の
の萩や竹の萩や竹の萩や竹の萩や

かく押丸のて持ては文子もてか
そとへくまは萩の萩の萩の萩の
とけををいせしや

とせんといふは山のもみ
此方を萩の萩の萩の萩の萩の萩の

一 萩の萩の萩の萩の萩の萩の萩の
三日月の萩の萩の萩の萩の萩の萩の
山を山を山を山を山を山を山を
萩の萩の萩の萩の萩の萩の萩の
の萩の萩の萩の萩の萩の萩の萩の
云なり

一 山を山を山を山を山を山を山を
く分りく分りく分りく分りく分りく分り
一 山を山を山を山を山を山を山を
とく唯雄の口は山は山は山は山は
押合は山は山は山は山は山は山は
萩の萩の萩の萩の萩の萩の萩の

- 一 五ヶ出ー切之ニ山を掃と云
- 一 田のおごーとカキ岩を岩これノ
 粉かと水多ハ草繩にてかけり申之
- 一 兎の種杭ハ岩を兎を結り申ハ
 秘多ク飯之かけやハことハ足の高
 より下をたをよふして方々ニま
 無くいながら其の末と後の方
 より引むー兎のこがハニまかけ
 としていながら又ニ寸許ニ草
 股ニ結り糸をうさぎの身ハ毛
 ニ毛をーして切之又身よりハ飯
 手ニ束に切ることあり粉傷より粉
 せ角よりまおの及て首の及ニ
 けて木より付てまゝせるハ木の先ハ
 とその足を結り申ハ之ハ余亦を
 ー申ハ木をまゝに製斗取飯を
 とよーてまゝ
- 一 うさぎ取飯ハ岩を岩の肩の股

- 一 の付やー上をよ力てニ月形よはし
 て其れを取飯あり但肩の取ハ刀斗
 面く取毛を取飯ハ能くまゝに毛
 とい身の内を云ハ取内ともまや
 一 身向丸も申ハ岩を岩のつと子
 を取く懐くあたれかやーと取
 を云ハ送物とぬあり
- 一 一本掛けの取と云申ハ岩母取
 の取也ハ出ハ申ハ
- 一 身ハ拾個と申ハ岩の取云取
 のとより母取餅を落して子ニ授
 取もんとぬ
- 一 火たきの取とカキ岩を岩これ
 を取れまりの取を火のあつて
 木まゝと申ハ
- 一 身ハの心取と申ハ岩を岩これ
 取ハ山と取ハハ付又何と云ハ
 申ハの取ハ心取と申ハ岩を岩これ

一 不の毛の多き半為首これ其
多のきく花さるや

一 大の逆と偽り半為首これ其
大なるかき先ひて我なりも誤く
ゆを逆偽とや一と付大何事
りに於を起るや

一 植野の二相と半為首これ其
を少す子の業之年中に肉を
徹を先後行ふなり花びをさる
なり花を二三葉の日をいよくあ
うて徹を解て少延は終り
るるこが花を半一花さる相
ま身うて草は花半山をれさる
と花の時又ひのま肉を長け徹を
花の中はつひま身うて肉を引
徹を解着るに上く花とめや
これを花中一花さるや

一 ともみあむの口餅と半為首

一 肉を口餅と半為首これ其
或は口餅とをいひて何とこの
也は口餅かき付身を起る
こはあや口餅教の時何れや

一 長命被命の身と半為首
長命の身は毛も被も長は厚く
毛はかき~~ぬ~~あさうの毛長し
目にかきまびこ一わがら毛も
手にあさうの毛も~~あ~~さう
とととも命長しこ被命の身
は皮厚く毛長く細一目をま
してまびこ一あれ髪もあ
さくゆび細一あうの髪はつひ
一ととも被命也

一 肉を口餅の中は口餅と半為首
中にある口餅とともは口餅の中
にあり大目小目と云半は小目と
云は目小目と云大目といふ

玉目ちさめを云くまあんと云に
玉目ながらて角の要のちくめを
云これ逸物目日光をねわ
まをぬいて玉目なる方はし
目うすさそむは能目のいれ
智うさるるると用さ目と種
のあれと先この方をむくは
まろく白く目の文もあはる
なり

一 古雄子とや事なる昔これ雄子
の雄とて石何より何ぬるなり
さるして取物なり

一 こののむじさうとさるる
は唯さ第一は用さゆかや
一 七筆の筆とや事なる昔けけ
七筆をばはつてさるるや又けけ
平筆の筆とつけさるる幅
とやけけつり平筆の筆と法あり

よう出さるるや

一 宿を指とや事なる昔指湯は
多を投たえしてさるるか
さう物物なり

一 湯の柱は柱物の大るとさるる何
昔これの柱を念為るは柱物の中
入るは皆湯の柱あり

一 小山物とや事なる昔小山物
まをれさるるを云く山物のまをれ
さるるは大山物とさるる一山とさるる
さるる

一 手板のまをれさるる昔手板を
手てさるる事は日板さるる事
日板に定まるとさるるさるる
まをれさるる一はめなまの上の
おまをれさるる手板一のまの定ま
るる事や

一 物に初くさるるを何とさるる

一 屋敷の羽子に名を著すを
一 けしきりて其の件は羽子
これと名の草にかけると
かり

一 羽子を一連と生て一と生て一と生て
清きりするもの著これ天子の
羽子を一布と云付は一連と生て
卯の二と云付は右の字を平に
十と云世の羽子と云や

一 本居と云本あると云はるる
本居と云は大羽子の羽子と
るは小羽子と云や

一 山別羽子と云平なる山別と
云は七月鳥の羽子と云はるる
父母の教するものも傳へたり

一 羽子を伝ふ時と云は傳へられ
てり能く和音と云は傳へられ
て綴るすは次傳は授命と云

綴を解れば中なるを心つけ
りま

一 羽子の羽子と云はるるま
目の内と云はるる羽子と云はるる
中

一 筆を伝ふの羽子と云はるるこれ
里の衆の中にて其を伝ふと云
をや

一 紅毛の羽子と云はるるこれ
赤羽を秋三月に紅毛の羽子と
紅の羽子と云はるるこれ清國の

一 平賀の羽子と云はるる一夜に紅毛
と云はるる情状は羽子の子細は
毎年平賀の羽子をまはると云

一 一と云はるるまはるる羽子の
まはるる羽子に投せると云はるる
今年羽子をまはると云はるる

一 平賀の内羽子と云はるる一夜の中にて

いふはよかきれい、
るれぬもの、
秘書の切紙あり

かう玉の糸を何本も織られ

まゆり、

一 勢の足をもふく、
そは天恩、
又字もあつて秘書と伝

鷹名所

一 丈身、
中此、
権烈、
是を、
后即位、
濟國、
仁徳、
献、
そを、
そを、
れ帝、
傳、
すき、
い、
精、
誰

手馴先作



一 首の爪と十字の字のそく形をよ

とす川の字のそく形をよか
爪を長くしてまぢらる誰のそく
形をよとよとに曲りて釣のそく
形をよとす

一 尾の合をよとす

多のそくと木のそくと南の
釣の利のそくと肺の荆の枝の
そくとよとよとよとよとよとよと

一 首を白くして散光のそく形

して血を鳥をよとよと眼を
珠子をよとよと雪のそくと
毛を霜雪のそくと才をよと
して金のそくと爪をよとよと
鉄のそくと頂を平ふて割の
お似たり形をよとよと卵のそくと
胸をよとよと物何れも腫を
よとよと翅をよとよと羽をよと
よとよと肉をよとよと何れもよと
よとよとよとよとよと

一 かしらうつろのそく形をよ

かしらうつろのそくと肺をよとよと
よとよとよとよとよとよとよと
よとよとよとよとよとよとよと
よとよとよとよとよとよとよと

一 けしむく厚く長くと命か

けしむく厚く長くと命か
よとよとよとよとよとよとよと
よとよとよとよとよとよとよと

一 若者を果てるとよとよと

一 雛
より飼えたるを云

一 毛の整うるを云
毛の整うるを云
毛の整うるを云
毛の整うるを云
毛の整うるを云

一 凡そふ年おとらんを云

一 一とや二とやしてを爪上を
一 一とや二とやしてを爪上を

一 一とや二とやしてを爪上を
一 一とや二とやしてを爪上を

一 一とや二とやしてを爪上を
一 一とや二とやしてを爪上を

一 一とや二とやしてを爪上を
一 一とや二とやしてを爪上を

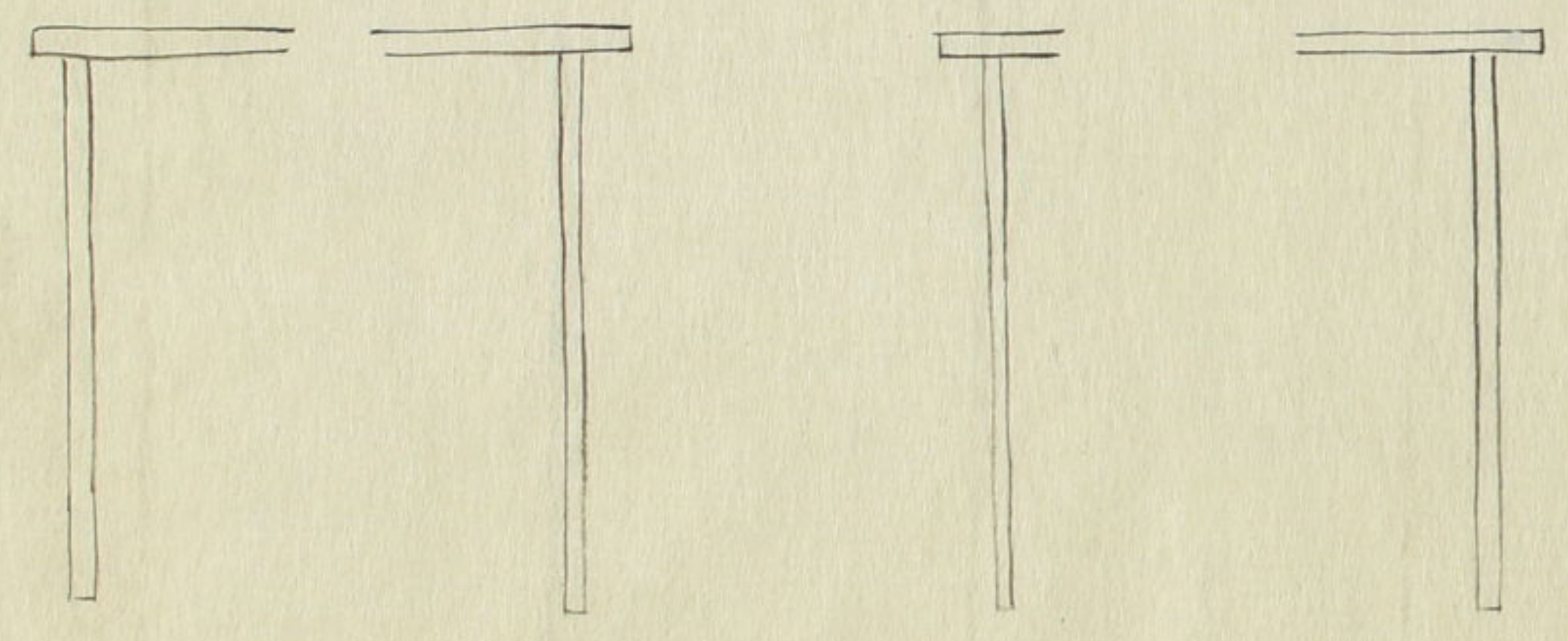
一 一とや二とやしてを爪上を
一 一とや二とやしてを爪上を

けいさ

一 考之 証傍 字部云 律律
 之印流之 多一 唐書大納言
 政賴名譽の通人 光末代
 養之 ありの 堪能ある 上より
 せらら いと云 政賴より 略る
 とく 祿付 言平之 政賴の
 年あり

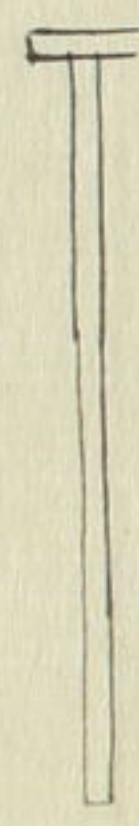
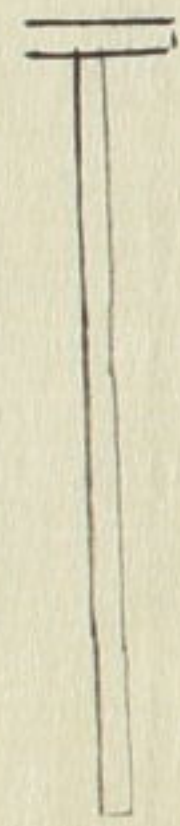
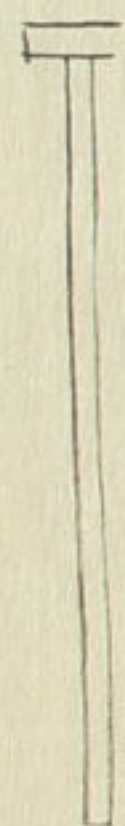
當流鷹十二架
 通鷹

同



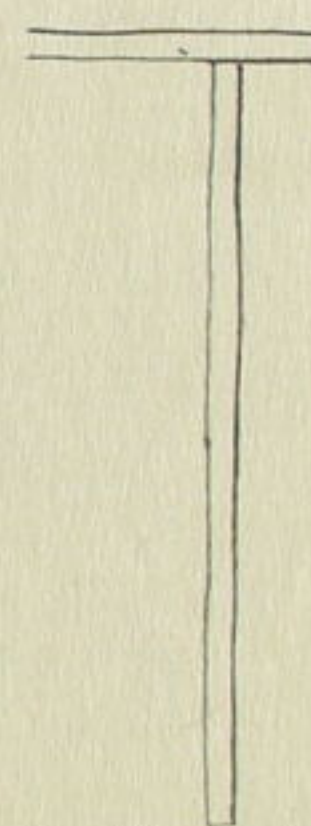
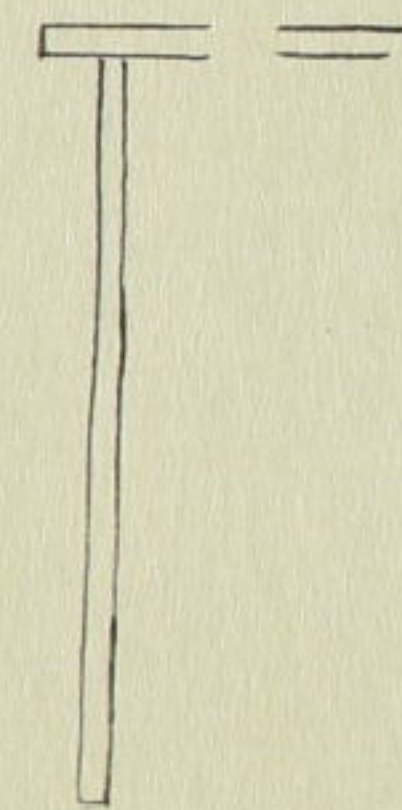
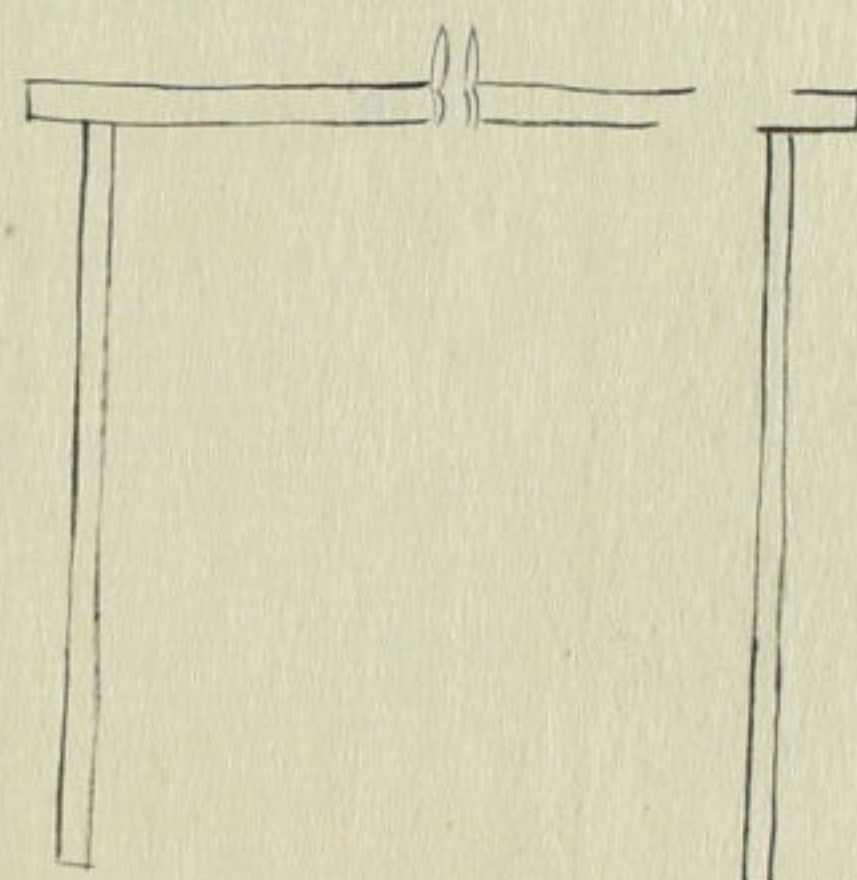
佛前

神前

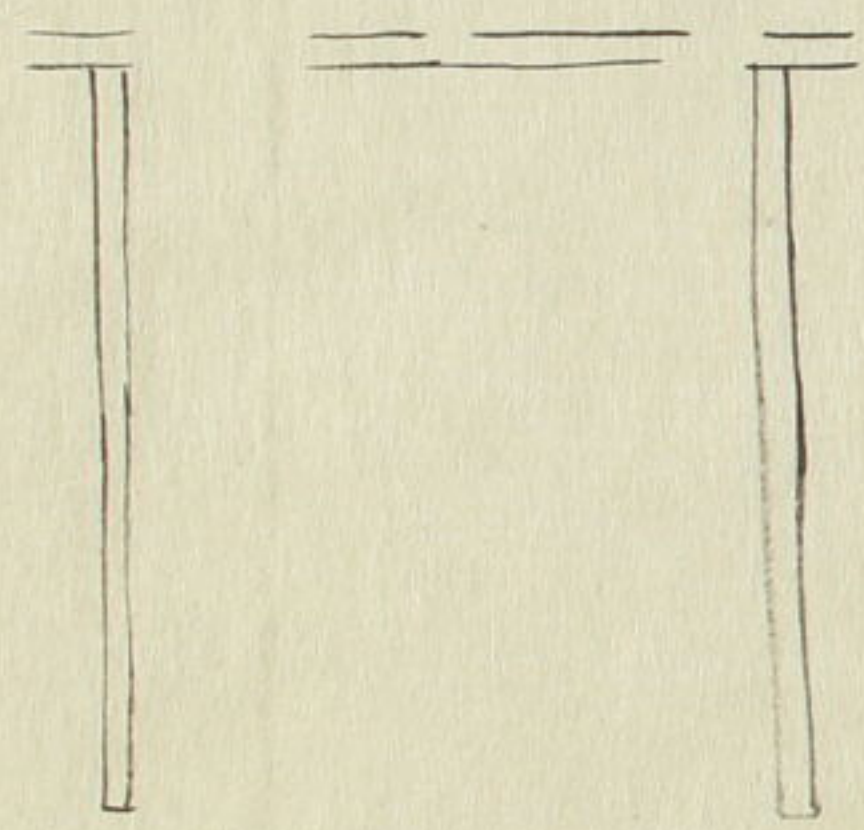


歸陳

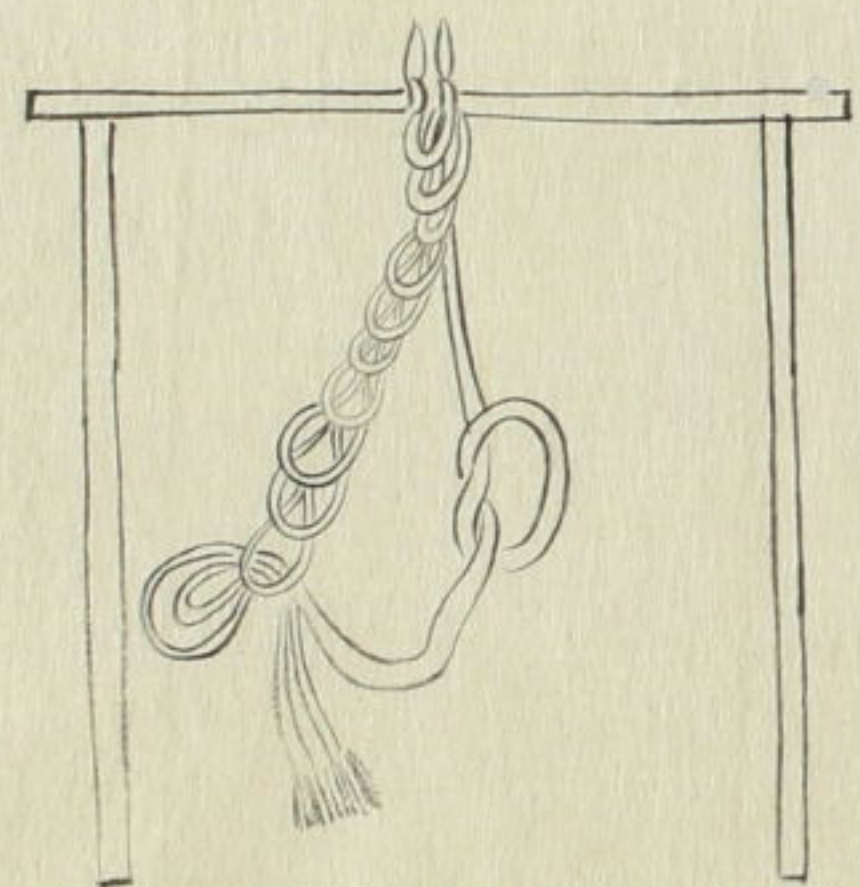
出陳



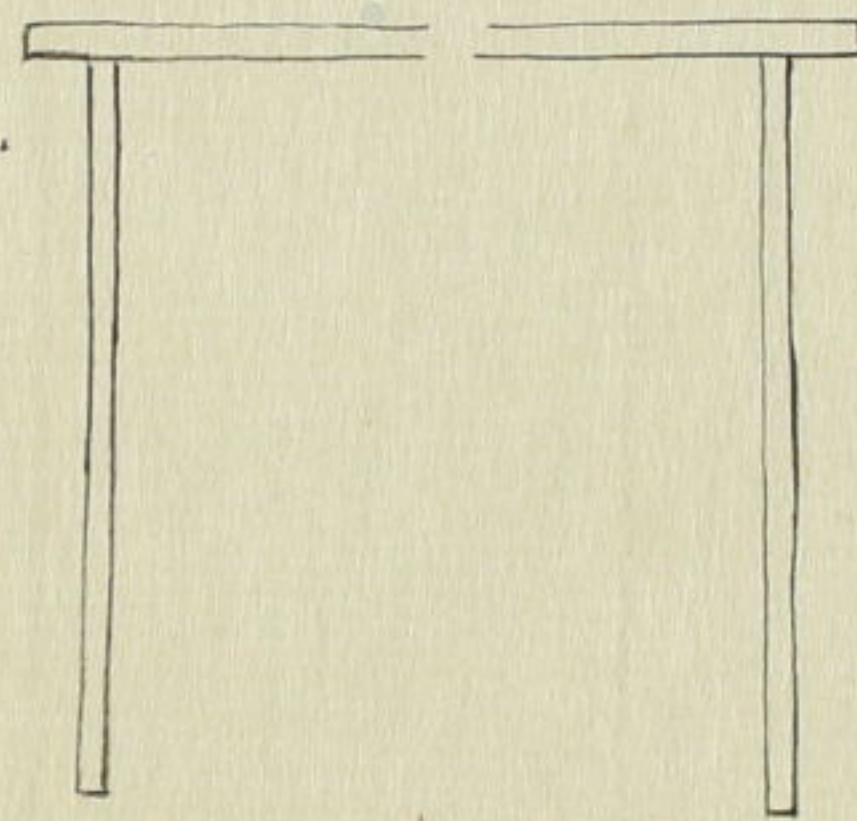
月見



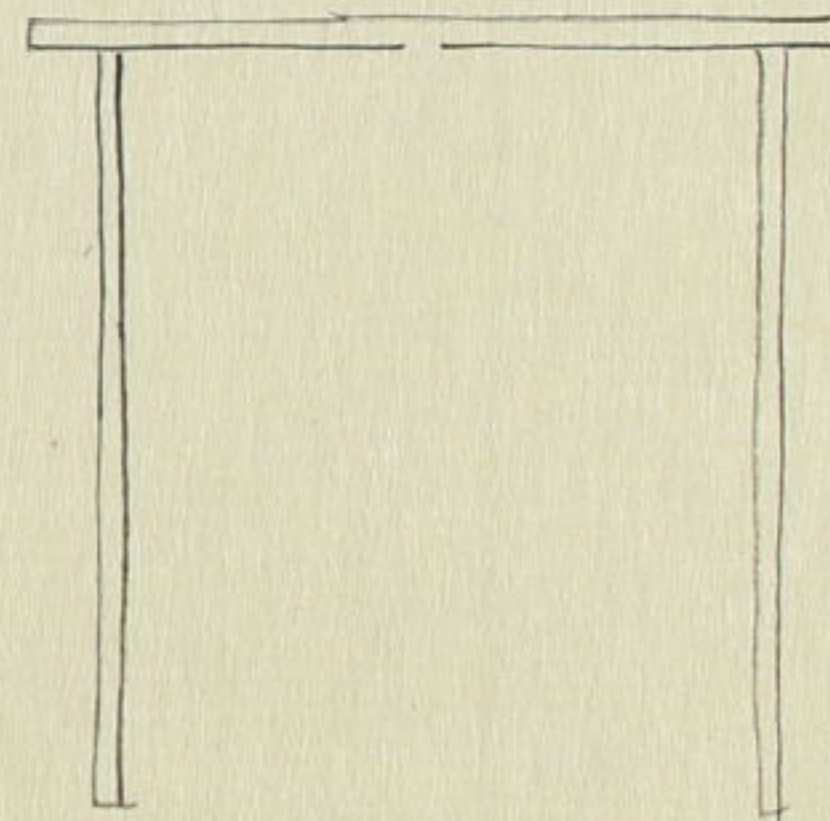
嫁娶



入部



元服
袴着

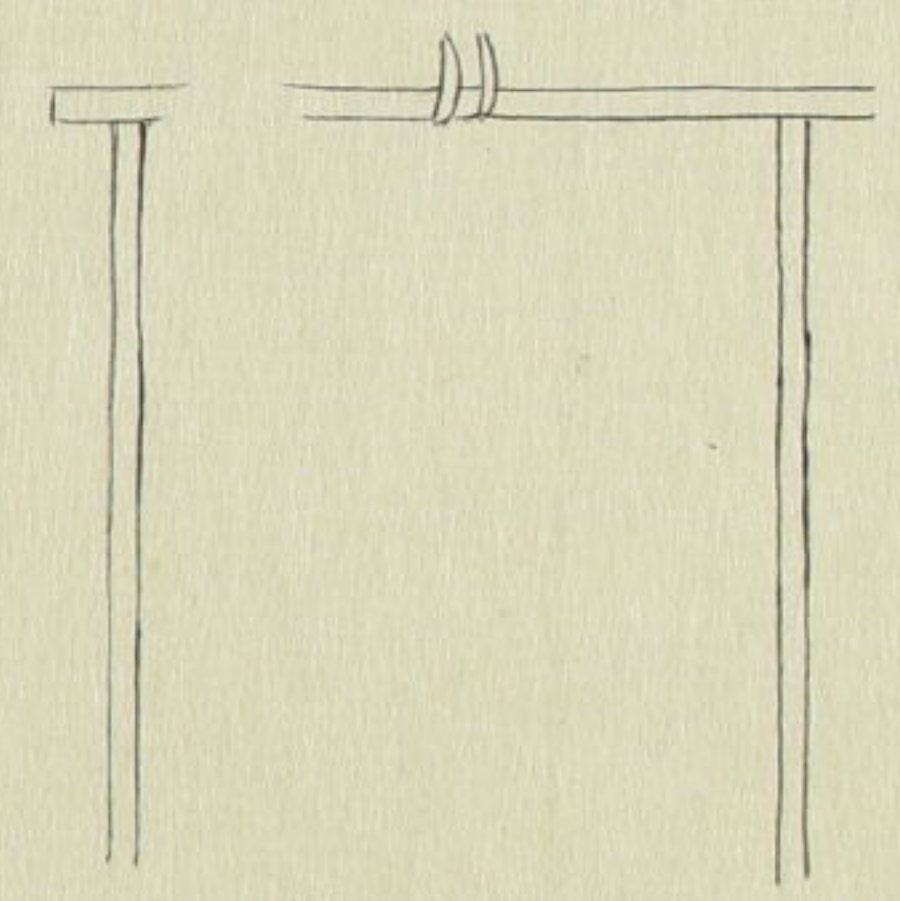
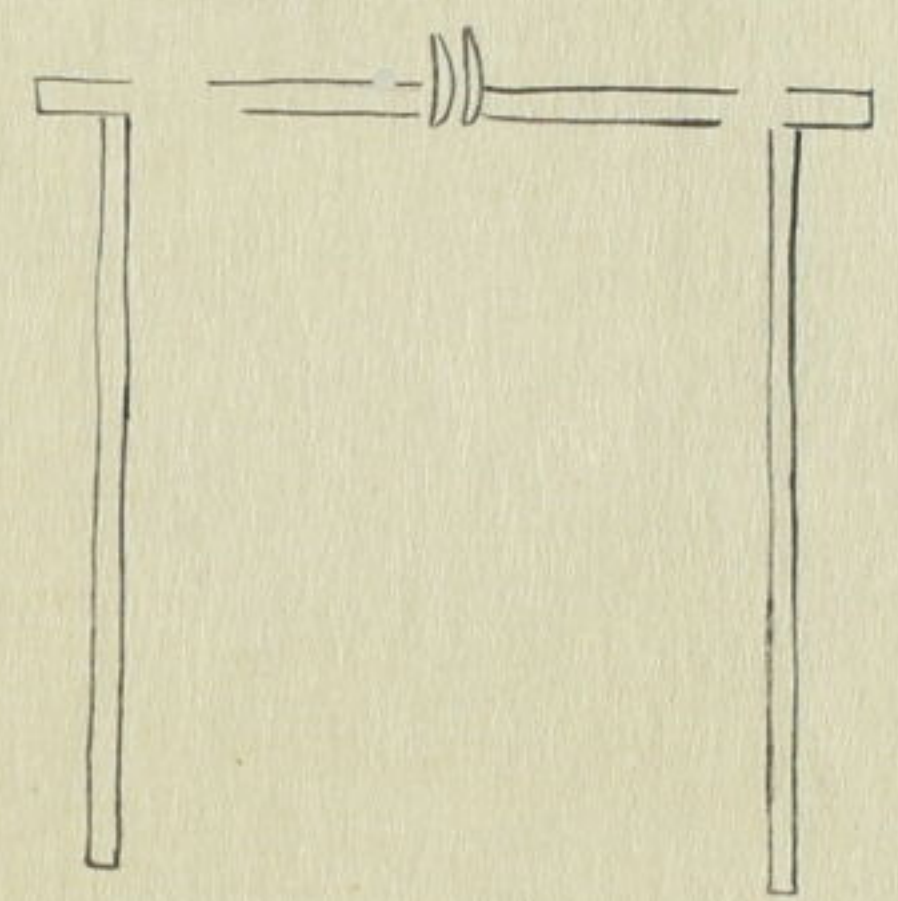


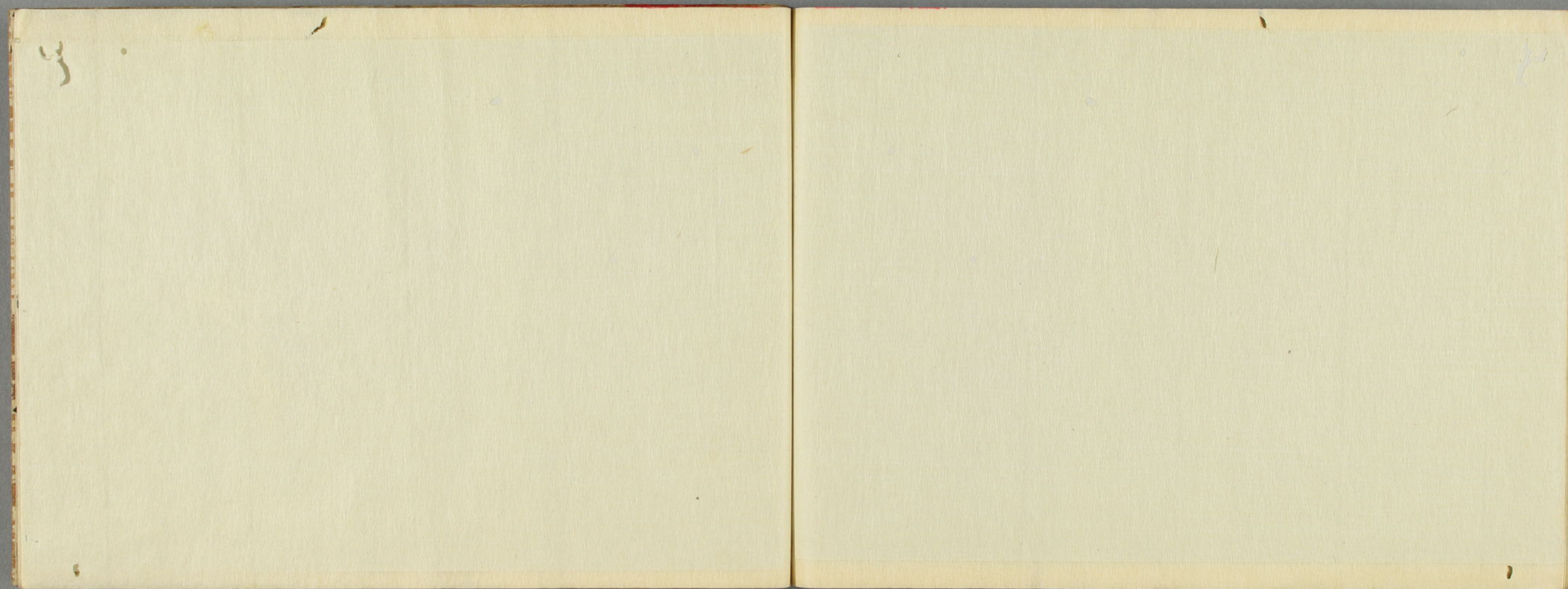
3

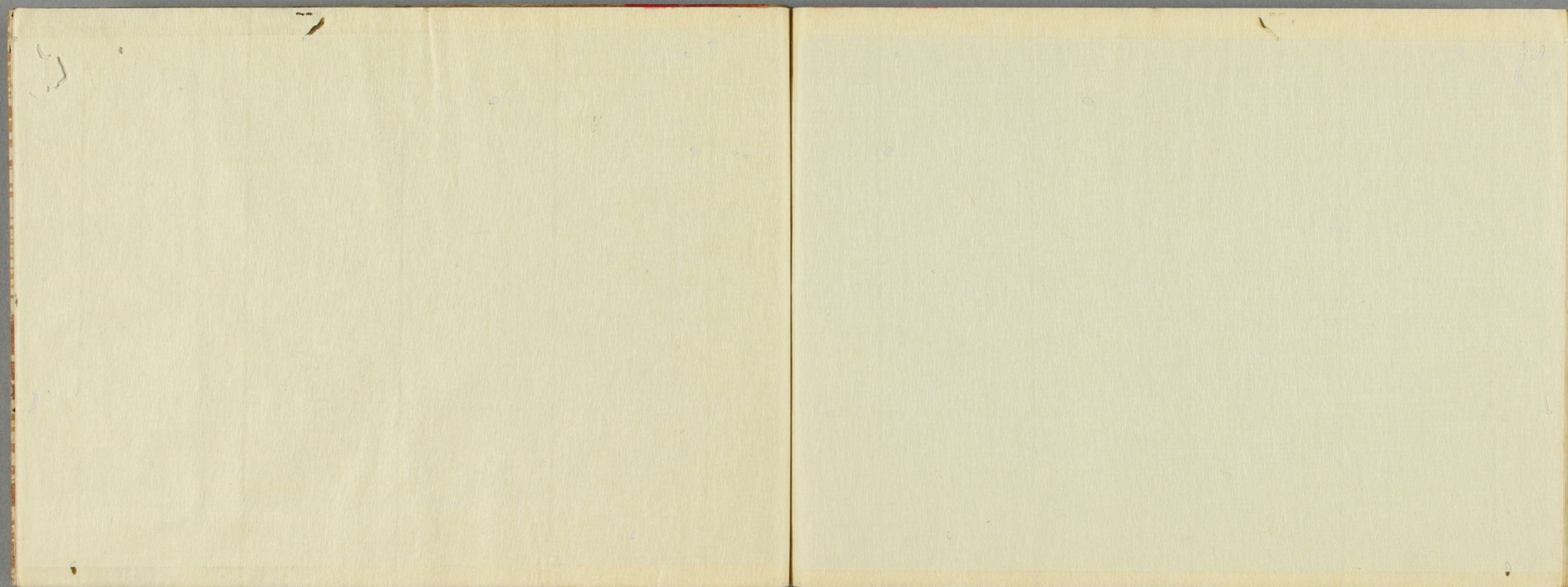
4

常

泊








右房書十冊依
由也中免書字年
可自也秘歷也

松岡清助

三月

辰子


八幡子一頁

